
スクール・ルーマー

雨宮翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクール・ルーマー

【Nコード】

N7629X

【作者名】

雨宮翼

【あらすじ】

僕こと斎賀遥真が通う、私立花月学園で飛び降り自殺が起きた。数カ月が経ち、皆が事件を過去のものにしようとしていた最中。

あれは自殺ではなく、この学園に住まう自縛霊『翡翠の死神』が起こしたものだ、と噂が流れる。

その真相を暴くため、同じく学園の噂となっている魔女が立ちあがる。

加えて。僕もその魔女によって嫌々付き合わされることになってしまった。

しかし、この事件は僕とも意外な関係性があつて……。

プロローグ

星が瞬く綺麗な夜だった。

私立花月学園の屋上扉が勢いよく、まるで蹴破られたかのような勢いで開く。

転がるように飛び込んできたのは、白いブラウスに赤いリボンを付け、グレーのカーディガンを羽織る。それに赤いチェックのスカートを穿いた女子生徒。

「はあはあはあはあ……」

息も絶え絶え。まるで何かから逃げてきたような必死さが彼女からは感じられた。

女子生徒は扉を閉めると、辺りを見回し、肩の力を抜く。

「はあ、はあ、はあ……」

過呼吸にも似た荒い呼吸を徐々に整えていき、さらに冷たい夜の空気で頭を冷やしていく。

『アレ』は一体何なのか、なぜ自分がこの状況下にいるのか。思考だけが巡り巡る。

とりあえず、唯一の出入り口は鍵を掛けて封鎖した。あとは朝になるのを待つしかない。早朝になれば部活動の面々が登校してくるから、『アレ』はどこかへ逃げるはずだ。そうならば自分は助かる。女子生徒はそう確信した。

確信して安堵した　刹那。

ドン。

自分の頭上から、扉の上にある貯水タンクから、『アレ』が現れた。

『アレ』は女子生徒を視界に入れるなり、手に持った鉈のようなものを振りかぶる。

「つつつ！」

多少の距離はあるものの、命の危険を感じ取った女子生徒は、体の動くまま回避行動を取る。

ガン。

思いあまって女子生徒は勢いのまま手すりに体をぶつけた。

「かふつ……」

肺に溜まった空気が衝撃で外に吐き出される。

ありえない。

女子生徒の頭の中をその言葉が駆け回る。

唯一の出入り口には鍵を掛けた。それに自分は『アレ』より先に屋上へ来たと確信できる。だから、こんなことはありえない！

瞬間移動か壁抜けでもしてきたのか。そんな能力など、人外にしか出来ない。それこそ、あの人が話していた化物でしかありえない。

そんな少女の怯える姿を見て、『アレ』は、赤いマントに身を包んだ怪人は、

「キシキシキシキシ」

と、気味悪い笑い声を上げる。

楽しそうに、愉しそうに、恍惚に浸るかのように。

女子生徒は何とか逃げようと、手すりを掴んで足にありつたけの力を込めて立ちあがる。屋上の手すりは小柄な自分が立った状態でも、腰の辺りまでしか高さがなかったため、容易に掴むことが出来た。しかし、数瞬、行動が遅かった。

標的が完全に立ち上がる直前、赤い『アレ』は飛びかかるかのよ

うに女子生徒に近づき、その柔らかい喉を鷺掴みにする。

「くあ……、うあ……」

女子生徒は氣道を圧迫され、うめき声を上げる。凶器を突き付けられた恐怖のせいで、体を動かすことが出来ない。

だが、まだ逃げるチャンスはあるかもしれない。自分を殺すだけなら、手にある凶器で簡単に殺すこともできた。だから、まだ、望みはある、かも、しれない。

「え」

次の瞬間、どん、と強く後ろに力を加えられた。

体から重力が消えうせる感覚。それと同時に、下へと落下していく風を感じた。

グシャ。

女子生徒は数秒後、地面へと容赦なく叩きつけられた。

「キシシシシシ。シシシシ、ヒヤハ、ヒヤハハハハハ！」

凄惨な死の瞬間を目に焼き付けた赤い『アレ』は、子供のように盛大に、無邪気に、大胆に、歓喜するように、狂気じみた笑い声を上げていた。

第一談 都市伝説

「あー、さっぱりした」

一日の疲れを癒して自宅の風呂場から、灰色のスウェットを着て僕登場。

いつになっても髪の毛をドライヤーで乾かさない派で、タオルでガシガシと拭いている途中。そこはもう手慣れたもんで、滴る水滴を服には落とさない。

僕はそのままりビングに赴き、冷蔵庫からミネラルウォーターを一本取り出し、自分の部屋へと向かう。

ミネラルウォーターをちびちび飲みながら、自室の扉を開いた瞬間、やるせない気分になる。

「またか……」

自室の扉を開けて真っ先に視界へと写り込むのは、真っ白いシステムデスク。普段は高校の勉強をするためではなく、もっぱらネットサーフィンに明け暮れるために使っている。

なのだけれども、明け暮れるネットサーフィンに使うパソコンが、デスクの上にはなかった。

風呂に行く前には確かにそこにあつたものがない。

つまり。まあ、つまりというほどのものではないけれど、誰かが持って行ったということになる。

うちにあるパソコンは父親が仕事で使うものと、僕が使うプレイベート用の二台しかない。

とはいえ、母親は普段パソコンを使わない（使えないから僕に頼んでくる）し、借りに僕が家にいないとき使うことになれば、メール

の一つでも送って来る。
なら、犯人の目星はついた。というか一人しかいない……。

僕は部屋から出て、すぐ隣にあるもう一つの子供部屋を見据える。扉には『ノックしてね』と可愛らしい丸文字でプレートが掲げられていた。

ここに盗人がいることは間違いなんだよなあ。

いつもなら盗人の気が済むまで貸し与えてやるが、今回ばかりは調べたいことが山積みでそうはいかない。

僕はプレートに書かれた注意を完全無視し、勢いよく隣の子供部屋の扉を開く。

「涼！ 俺のパソコン勝手に使うな！」

目当ての人物はすぐに見つかった。

僕の愚妹、齋賀涼莉はベッドの上で、星柄モスグリーンの布団に包まれている。布団から頭と手だけ出し、パソコンを操作していた。ヤドカリかよお前。

涼莉は僕の怒鳴り声をまるで聞こえなかったようにスルーし、パソコンにかじりついている。

こんな状況を僕はウンザリするほど繰り返している中で、すでに対策、というか決まったやり取りが出来上がっていたりもした。

おもむろに僕はヤドカリ状態の涼莉に近づき、キーボードの右上に設置されている電源ボタンをひと押し。

「あ、え、あれ？」

パソコンがスリープ状態にされたことで、涼莉は現実世界に引き戻された。

「返してもらっからな」

妹の顔色も窺わずに自分のパソコンを掴み上げる。
しかし、手にしたものからはものすごい重量を感じた。
原因はすぐに判明。

涼莉が眉間に皺を寄せ、遥真のパソコンにしがみついていた。

「離せよ、テメエッ」

「今、いい……ところ……なの。返して……よ」

力づくで奪おうとする僕に、涼莉も歯を食いしばって抵抗する。
僅かながらパソコンからミシミシという音が聞こえてくる。

壊れる、壊れる！

さすがにマズイと思った僕は、ぱつと手を離れた。すると、いきなり抵抗がなくなった涼莉は反動に負けて、パソコンを額にしたたか打ちつけていた。当然、額を抑えてうずくまる。

その隙に、僕は所有物を再奪取。

「ミッションコンプリート」

部屋に戻ろうと体を反回転させた刹那、今度はスウェットの裾を引っ張られた。

呆れ顔になる僕は顔だけ振り向かせ、「何？」と聞き返す。

その質問に、

「……お願いしますお兄様。もう一時間だけ私めに猶予をお与えください」

と、涼莉は布団に顔を埋めたま、気持ち悪い敬語で懇願した。
妹が時間制限を口にしたら、もう策略が尽きたという証拠。これ

を拒否すれば後は本当の意味で実力行使が始まる。兄が妹に本気で手を出せないと分かっているの行動だ。

一時間……。後々面倒になるよりはマシだろうか？ うーん。

一瞬で過去の厄介事を頭に浮かべ、思考する。

「一時間経ったら絶対返しに来いよ……」

結局、妹に競り負けることを選んだ。あえて、だよ。あえて。

涼莉は布団から顔を上げ、明るい表情で、

「さっすが兄ちゃん。話が分かるうー。そんな心配しなくても満足したらちゃん返すってば！」

こうなることを予想していたかのようなテンション。

さすが十数年一緒に暮らしてきた妹だった。兄のことをよく分かっている。

「ほら、私も集中して調べ物したいから出てった出てった！」

やっぱり力づくで取り返してやろうか、こいつ。

僕はベッドから降りた涼莉に背中を押されて、部屋から強制退去させられる。

扉を閉める時の妹の勝ち誇った笑顔に、

「お前、何そんな真剣に調べてんの？」

と、最後の質問を投げかける。

それに対し涼莉は、

「都市伝説だよ」

何をいまさら、と言わんばかりの表情でそう答えた。

第二談 友人A

次の日、学校での昼休み。

学食で買って来た好物のメロンパンを、ちょうど大口開けて頼張ろうとしたところだった。

「遥真ー！ ちょっとこっち来てくれー！」

クラスメイトの生田に名前を呼ばれ、メロンパンを袋に戻す。

キチンと行儀よく食べ歩きはしない、わけじゃないけど、なんとなく袋に戻してみた。

声の先には、ダークブラウン頭で白いシャツの上に校章入りの茶色いカーディガンを着、チャコールグレーのスラックスを履いた少年がいる。本当は赤いストライプのネクタイも付けるのだが、それはしていない。ちなみにコイツは小学校からの腐れ縁仲間の一人。

「おい生田や、今の僕の状態を見てたか？ 日本人が生み出した食品の中の最高傑作中の最高傑作。そう、メロンパン！ それを今まさに、僕は口に運ぼうとしていたところ」

「ちよつと聞いてほしいことがあってさー」

生田は僕の無意味に饒舌な状況説明を完全にスルー。

「無視か生田？ お前には僕の高校生活において唯一の楽しみであるこの昼休みを邪魔する権利があるとでも」

「あー、はいはい。食事中に話しかけた俺が悪かった。メロンパン食いながらでいいから聞いてくれよ」

「うおー、うぜえ。」

さらつと流しやがつたぞコイツ。

まあ、仕方ない。たまには下手に出てやろつ。

「頭を床に擦りつけるほど頭を下げられては仕方ねえ。とつとと言つといい、下僕よ！」

奥歯を噛み締めながら、僕は近くにある誰かの椅子に腰かけた。

「んー、ちよいこのメール見てくれよ」

下僕を再度スルーして生田が携帯のメールを見せてくる。おそらくは彼女から来たメールだろう。そんなものを彼女いない歴イコール年齢の僕に……ゲフンゲフン。いやいや、恋愛経験豊富すぎる僕に見せてどうしようというのか。あ、恋愛経験豊富だからこそ見せてきたのかなコイツー。あつはつはつは。

嫌がらせならこの携帯有無を言わず真つ二つにしてやる。

ディスプレイに表示された本文は、キラキラの絵文字やら顔文字やらで埋め尽くされている。内容は生田からの誘いを断つたもののよう。バツサリではなく、明らかに遠回しな感じ。

この本文を見せた後、もう何通か同じようなメールを見せられた。

「これってさ、どう考えても怪しくね？　いくらなんでも断られ過ぎじゃね？　それによくコソコソメールとかしてんだよ……」

「あー、浮気だ浮気」

僕はメロンパンを再び袋から出しながら、ストレートに言い放った。

声には全くやる気をだしていなかったが、生田は気にしてない様子。

あれじゃね、ドラマなどでよくある展開だと、彼氏からの誘いを

嘘で断り、街中で他の男と歩いている姿なんか目撃者されちゃったりする。

もしくは漫画やアニメにある、別に隠れてプレゼントなんか用意してないんだからね、的な展開。そのどちらかに近い可能性が考えられる。

今回はたぶん前者だろうけど。

「やっぱ浮気だよなあ……。俺は常に健全な付き合いをしてたつもりなんだけど！　どうなってんだ！」

「僕に聞くなよプレイボーイ。っていうか生田が健全なお付き合いを実行出来る奴だとは知らなかったぞ。お前は女の子をとっかえひっかえするタイプだろ」

「勘違いするな！　俺は見たとおり美しいイケメンだろ。世界中の女の子は俺をほっとけないってわけさ。女の子は皆平等に俺と異性交遊する権利がある！　だから、俺もそれに準ずる！　それが俺の生まれた使命だと思うから！」

目の前の、明らかに生物学的に人種の違う親友の熱弁に僕は冷めきった視線を送る。

確かに生田は中性的で整った顔立ちをしているし、性格も女たらしを除けばイイ奴に分類される、かもしれない。

しかしこういうときは、裏路地で刺されろ、と僕は心の中で強く念じる。ていうか今すぐ刺される。そしたら僕は優しい声で救急車を呼んでやる。

現実には、如何せんまだ襲われたことはないらしい。

「で、そのメールを僕に見せてどうしろと？　お前の彼女の後をこっそり追って、浮気現場でも写メってくればいいのか？　絶対しないけど」

「んだよそれ！　そこは『仕方ねえ、親友のために一肌脱いでや

るか』的な言葉で恰好つけるところだろうが！」

「っざけんな！　どうして僕が貴重な自分の自由時間を、くだらん友人のくだらん恋愛のためにくだらん行動をして費やさなきゃならんのだ！　僕は自分に有益な物以外、他人のために時間を使うつもりはない！」

「出た、出ました、出ちゃいました。遥真のさして可愛くもないツンデレ！」

「ツンデレ?!」

一体今の会話のどこに、そんな特殊能力にも似た萌え要素が含まれていたのか。

ていうか、僕に使うな、気色悪い！

「他人のために時間を使いたくないとか言いながら、昼食中にも関わらずくだらない俺のところに来て、くだらない俺の恋愛話に付き合ってくれてるっていうのにー！　ちょっとお節介なところも女子にはズキコンポイントだぞ遥真！」

う……。言われてみると、そんな感じでもないこともないけれど、けど、それはそれで違っただろ。

僕らの会話が聞こえていた周りのクラスメイトたちも、生田のする論議に、あるある、と首を縦に振っていた。

いや、違っただろ！　萌え要素ないだろ！　ないよね?!

「俺との対話でもそういう萌えポイントをさりげなく使ってくるとは……。はっ！　まさか俺も攻略の対象に　」

「うがああああ！」

僕はついに恥ずかしさが爆発した。そのままの勢いで生田の握っていた携帯電話を奪い取る。

「てめえの彼女についての相談じゃなかったのか！ 待ってる、辱めを受けたこの僕が今すぐに貴様の悩みを解決してやる！」

立ち上がってそう叫ぶと、生田携帯の電話帳からメールの送り主にコールする。電話を耳に当てて、準備完了。三回ほどコールしたところで、「もしもし？」と生田の彼女が通話に出た。コールの途中、慌てた生田が僕から携帯を奪い返そうとしたが、一発殴って静かにさせた。

「もしもし、生田の彼女か！ 目の前で沈んでるゴミ野郎が何であんたに誘いを断られるのか知りたいそうだ！ 五秒以内、三十字以内で述べる！ おい、困惑してんな！ とつと理由だけ述べる！ あ？ 誕生日プレゼントを選んでた？ ちっ、面白くない。聞いたかゴミ野郎、誕プレらしいぞ。よかったな、浮気されてたわけじゃなくて。あん？ おいゴミ野郎。貴様の彼女が教室に来るそうだ。二重によかったな。というわけでもう永眠してもらえるか？」

につこり笑顔で、僕は友人の左頬にコークスクリューを少し、ほんの少し力を加減してお見舞いした。

生田は鈍く短い悲鳴を上げて、机に力なく突っ伏す。

心やさしく親友の悩みをスッキリ解決した僕は、手にあった携帯をそつと生田の手に返してやる。

「もうコイツの相談事には乗らねえ……」

額にじんわり滲んだ汗を手の甲で拭くと、僕はメロンパン片手に教室を出るのだった。

第三談 『柏樹彩乃』

教室を移動した僕は、校舎の中庭にいくつかあるベンチに体を預けていた。

この花月学園は、コの字型の作りをしていて、デッドスペースを埋める形で中庭が作られたと言われている。運動場を作るには狭いし、他の建物を作るには見栄えが悪い。なら、いつそ噴水でも作って中庭にしてみよう、という学園長の思いつきが案として通ったらしい。

方角が良かったのか、日が当たる場所として昼食時、生徒にもさりげない人気がある。

しかし、今は僕以外誰もいない。まあ、理由はちゃんとあるんだけどね。

でも、静かでポカポカと気持ちのいい気候の下で食べる食事はいいものだ。

僕も降り注ぐ陽光を体に浴びながら、メロンパンを口に運ぶ。

うわ、最悪。

メロンパンを口に入れた瞬間そう思った。

「くそう。暖かいからメロンパンの砂糖が溶けてる……。カリカリサクサク触感が失われたあ……。これも全てあのアホのせいだ」

頭もベンチに預け、空を見上げるような形になった。太陽が眩しいため、目は瞑っておく。でも、眩しかった。

「はーるっ！」

急に名前を呼ばれたかと思うと、白かった臉の向こう側が陰る。

ゆっくり薄く目を開いてみると、そこには目があった。というか目が合った。それはよく見知った少女。

「メロンパン片手にお休み中かな、遙？」

「いや、顔近いから。傍から見るとちよつと勘違いされそうだから。……離れて」

「いいじゃん。私たちの仲なんだし」

「腐れ縁なだけだ。とくかく離れて。特定のやつから弄られるから」

少女はちえー、と口を尖らせて顔を遠ざけた。そして、そのままとことこベンチの前に回り込み、僕の横にちよこんと座る。

彼女は柏樹彩乃。生田と同じく僕の幼馴染で、現在のクラスメイトの一人。

小柄な体躯にこれまた小顔な綺麗な顔立ち。癖つ毛なセミロングにシャギーを入れているよう見せている髪型に、かなり気を使っているらしい。また、右側につけている三連流れ星のヘアピンが目を引く。制服姿だが男子とは配色が違い、白いブラウスに赤いリボンを付け、グレーのカーディガンを羽織る。それに赤いチェックのスカート、という姿だった。

噂ではかなりモテると噂されてるけど、どうだかなあ。性格に難あり、だし。まあ、それほどこいつのモテ度に興味はない。

「で？ 教室からわざわざ追ってきたってことは、用があるんしよ？」

「そうだねえ。遙が浮気してないか確かめにとか？」

「疑問形で返されても困るんだが……。しかも俺に恋愛の自由はないのか」

「じゃあいつそ付き合っちゃう？ 私が恋愛管理してあげるよ」
「遠慮しとく。ホント生田といい彩乃といい僕をからかうのが好

きだな。もう慣れたけど……」

僕は悲しみに満ちた眼差しを明後日の方向へ向ける。

あー、過去の嫌な思い出がフラッシュバックしそう……。

「今回は本気かもしれないじゃん？」

「……んな阿呆な。後からの展開が目には浮かぶっつーの。いい加減本題に入れよ。昼休憩終わんぞ」

「ちえー。しょうがないか……」

またもや彩乃は唇を尖らせて不満そうな顔をする。

もしかしたらこれが本題なのかもしれない　　とも思ったが、すぐに違うことが分かる。

「遙さ、都市伝説って知ってる？」

「そりや普通知ってるだろ。僕も詳しいわけじゃないけど、東京都の下水にワニがいるって伝説くらいなら知ってんよ」

「よろしい！　なら、私が特別にこの学校の都市伝説を教えちゃう！」

「いや、別に興味な　」

真顔で断ろうとしたものの、テンションがあがっている彩乃に遮られた。

「最近いくつか真相が暴かれちゃって数減っちゃってるんだけど、やっぱり一番有名なのは魔女かなあ？　聞いたことくらいあるでしょ？　旧校舎には魔女が住み着いてるって」

旧校舎ねえ、と僕は肩をすくめる。

旧校舎というのは今、僕たちがいる新校舎からものの数分で辿り

つく、地図上で見れば真横に位置する名前の通り古い校舎である。
中高一貫の校舎編成であるため、生徒数増加に伴う教室の増築、
また新学科設立に必要な実技室の設立などのために新校舎が作られ
ることになり、必要のなくなった校舎でもある。

どうして必要のないものを数年も放置しているのか。確かにそんな話が以前オカルト染みた話題で盛り上がったこともあった。解体しようとしてきた業者が謎の事故を起こしたとか、実はあの真下に核爆弾が埋まっいて旧校舎を壊すと反動で爆発するとか、その他様々な噂が流れた。

その中に魔女が住んでいるという噂も確かにある。

しかし最終的には、新校舎を作ったため旧校舎を解体する資金に余裕がなくなった、という現実味の塊みたいな回答が出回り幕を閉じたはずだった。

それに関しては紆余曲折あり、僕も一応絡んでたり絡んでなかったり……もする。

「で、魔女がどうしたって？ 占いでも頼みにいくのか？」

「遥との相性占いならやってもいいかなあ……、ってそうじゃないかね！ どうやらその魔女、実は存在するらしいのよ。赤い服に身を包んだロングヘアの魔女。夜中に見た人がいるんだって！ それもつい最近！」

「ふうん。それは凄いいんじゃない？」

メロンパンをかじりながら、とりあえずそれらしい相槌をうつ。
なんでもいいけど、昼飯くらい静かにゆっくり食べさせて欲しい……。

「でしょでしょ、凄いいよね！ ってことで、今日の夜確認に行こうー」

「嫌」

即答。

テンション最高潮だった彩乃も、さすがに目を点にした。

「なんでなんでどうして！ 遥ならここで『マジで！ チョベリグって感じ！ ナウなヤングには欠かせない話題って感じ！』って超ノリノリでオーケーしてくれると信じてたのに！

「いつ僕がそんなハイテンションなギャル語使った！ しかもそれ僕たち生まれて間もない頃使われた死語クラスのギャル語じゃねえか！ よく知ってたな！」

僕はメロンパンの欠片を唾と一緒に飛ばしながらツツコミを入れた。

やめてくれよ、ガングロパンダに超ミニス力姿とか……。

「私てきにわあ、今の言葉が時代遅れって感じい。チョベリバー」

「ギャル語はもういいよ！」

「むう。遥のツツコミには愛が感じられないなあ、もう。いいよ、じゃあとっておきを話すから。驚いて腰抜かさないでよー」

僕は、全く身近にないギャル語をここで使うクラスメイトを目撃してしまったことのほうが驚きだ！ ということをお口には出さないことにした。

心の中では力いっぱい叫んだけどね。

「魔女は反応悪かったけど、こっちは絶対知ってるよ！ 最近問題になったばかりだからね！」

「それ……、例の飛び降り事件か？」

「ガーン！ 先に言われた……。私の唯一輝ける瞬間を横から愛

しき人に掠め取られた……」

ベンチから滑り落ちるように地面へ膝をつく彩乃。彼女の頭上だけに雨雲があるかのような暗さを体全体で表現しているように、陰鬱な空気が漂いだした。

僕はそんな彩乃の状態も無視し、

「あの飛び降り事件も都市伝説なのか？　だったら驚きだな……」

飛び降り事件というのは一週間前、この花月高校で起きた事件のこと。深夜学校に忍び込んだ名称不明の三年生が事件名の通り、屋上から飛び降りた事件のことである。家などには特別書置きなどは無く、受験のストレスからの突発的な事件として処理されたという。ここ最近一番話題騒然となった事件だった。

付け加えると、飛び降りた場所はまさにこの中庭。

事件の痕跡はもう跡形もないが、近づく生徒はほとんどいない。

そんな曰く因縁ありの場所でおしゃべりしている彼らだった

「そうなのよ！　あれはこの学校に取りつく自縛霊、『翡翠の死神』の仕業って言われててね。近々

第二第三の事件も起きるんだって、主に中等部ではキヤーキヤー怖がられてるらしいのよ！」

「その手の話題にいち早く食いつく年齢だからなあ。降りかかる火の粉が迷惑だ……」

昨日の妹である涼莉とのやり取り、というよりも攻防を思い出す。この飛び降り事件のせいで、中学生である涼莉がパソコンによりしがみ付くこととなったのかと、ため息。

「そんなわけで、遙！　さっそく私と事件解決の捜査に」

「嫌だ」

いい加減このやり取り面倒くさくなってきたなあ。

ていうか、他の奴誘えよホント。

僕を、巻き込むな。

「あーもう、どうして断るのよ遙！ 乗り悪いなあ。ここは『僕もそう考えていたところさマイルスイートハニー。さあ、二人で事件解決のランデブー』としようじゃないか。そして、この事件が終わったら僕は……君と婚約するんだ！』みたいに気障なセリフを言うところでしょ！」

「こつちが、あーもうだよ！ 突っ込みどころ満載すぎる！ っていうか最後確実に死亡フラグだよな？ そうだよな？ 展開的に死ぬんなら尚更僕は捜査なんてしないよ！」

「大丈夫大丈夫。そこはほら、そこはかとなく流れるに命だけは助かる的な？ 戦っても大けがを負うだけで命に別条はない、みたいな展開になってくれるって。たぶん！」

「漫画か！ しかもそこはかとなくって、はしよりすぎだろ！ それよりも僕は何と戦うんだよ！ 都市伝説が具現化でもすると？ 単なる噂話が実体化してたまるか！」

もう今日何回入れたか分からない僕のツツコミが炸裂した途端、彩乃の言葉がピタリと止まった。

突然口を閉ざされたことに対し、言いすぎたかと僕は若干焦りを見せる。

さらに、彩乃はさっきまでとは打って変わって笑顔を消し、無表情で僕の鼻先に指を突き付けた。

「都市伝説は実在するの。信じるか信じないかは遥の勝手だけど、気をつけたほうがいいよ。もう事件の歯車は回りだしているのだから」

ら……」

彩乃は低い声音で、忠告する。

急激な対話の温度変化に妙な現実感を覚え、僕はごくりと喉をならす。

「なーんてね。驚いた？ 驚いた？ もう顔が強張ってるぞー。私がほぐしてあげようかー。んー」

彩乃は僕の顔を両手で固定し、そのまま自分の顔を近づける。なぜか手だけではなく顔も。咄嗟のことで反応が遅れた僕は成す術もなく体を固まらせる。

近い近い近い！ 警告アラート、デンジャーゾーン！

だが、彩乃の顔は一定の距離以上近づくことは無かった。

「こら、あなたたち。公然の場でよくこつもまあ、不純異性交遊を……。しかもここはまだ立ち入り禁止区域だっていうのに」

僕は彩乃の手を振りほどき、声の主を視界に入れる。そこには棒付きキャンディーを咥えた白衣姿の女性がいた。髪型は長い茶髪をポニーテールにしているのか、顔の横から髪の毛が一房ひよこひよこ揺れているのが見える。

追牧理実保健医だった。幾度となく生田を保健室送りにしている遥真にとっては顔なじみの教師だった。ちなみに彼女はバスケット部の顧問もしている。理由は可愛い子が多いから、らしい。

その追牧講師が彩乃の首根っこをしっかりと掴んでいるようだ。

「ほら、斎賀君。昼休みも終わるから早く教室に戻りなさい。このことは内緒にしてあげるから。その代り、堂々と立ち入り禁止区域で不純異性交遊はしないこと。いいわね。」

「わ、分かりました今後気をつけます。あと、寸でのところで助けてくれてありがとうございます」

「な、何よ遙！ 私との不純異性交遊がそんなに気に入らなかったわけ？」

彩乃の爆弾発言に遙真は何か返そうと口を開きかけるも、追牧講師に目で静止をかけられる。

キンコンカンコン。

直後、機械質のチャイムが鳴り響いた。

「さあ、斎賀君急ぎなさい。でも、柏樹は話があるから保健室。みっちり教育し直してあげるわ。安心しなさい。次の授業の先生には私から話をつけとくから。さあ、私の楽しい授業の始まりよ」

「いーやー！ 助けてー！」

彩乃の懇願する眼差しが執拗に遙真へと注がれるが、僕はご愁傷様と手を振って見送った。

いや、危なかった……。

「さて僕も教室に戻る　　うわっと……！」

誰かが横から追突してきた。そこには、自分より頭一個分背の低い女の子。服装が彩乃と同じ制服姿だが、リボンの色が赤でなく緑だった。これは花月学園中等部の証。

「ご、ごめんなさい……」

中等部の少女は急いでいるのか、一言謝るなり足早に去って行った。

（あの子、どっかで見たことあるような……。ああ、確か涼莉の友達だったか？　一回だけ家に来たことあったっけ）

本人を見たのは一度でも、涼莉の部屋にあるコルクボードに貼られたプリクラでは何度かお目にかかっている。あの子はこっちに気付いていなかったようだけど。

（まあ、別にいいんだけどさ。　　ん？）

僕は今度こそ教室に戻ろうとすると、不意に後ろポケットに入れた携帯電話が振動した。振動時間は短く、着信ではなくメールのようだ。

とりあえず、内容を確認するためにメール画面を開く。

差出人『魔女』。

そこには、つい今し方話題として上げられていた、都市伝説と噂される人物の呼称が表示されていた。

第四談 魔女

放課後、僕は生田からのしつこい誘いを断り、図書室へ向かった。しかし、校内を歩いてはいない。足を運んでいるのは、旧校舎。古びていて、曰く因縁……はないが呪われた旧校舎と名付けられているところ。

実は取り壊しが決まっていたのだが、業者が作業をしに来ると必ず大小様々な事故が発生するらしい。最後には死人が出たとか……出なかったとか。

付け加えると、中には噂の魔女がいるとかいないとかで、犯人はそいつだとかも噂されている。

場所は地図上で見ると新校舎の右下に位置している。行き方は至って単純。新校舎の真後ろに出て、そのまま地図通り真っ直ぐ進むだけ。

そんな、誰も足を踏み入れないところへ歩みを進めていた。

目的の図書室は二階に上がり、右手側ある。真っ先に目に入るのは茶色一色の扉。ガラスのはめ込みも、装飾も何も施されていない。シンプルイズベストな扉。

僕は少し力を入れて、立て付けの悪い扉を引く。中は至って普通の図書室。真ん中の通路を残して、大きな本棚が所狭しと並べられている。

けれど、本棚の一番にある死角となる場所だけは異様な雰囲気が漂う。

そこには紫色の派手な一人用のソファが置かれ、派手な銀装飾の小型円卓テーブルが置かれている。周囲には本の山。それに隠れてお菓子や飲み物の類もあった。

この部屋の主、都市伝説と噂された『魔女』は紫色のソファの上 にいた。

文庫本程サイズの本を読んでいる。
そして、何故か学校指定の赤いジャージを着ていた。

魔女検証その一。

真っ赤な服に身を包む、というのは赤いジャージに身を包む、だった。

「よう、ジャージ魔女」

「ああ。ずいぶんと遅い登場じゃないか、斎賀」

来訪者に気がついた魔女は、読んでいる本から目を離し、僕を見据えた。

魔女は綺麗な腰まで伸びる茶髪だが、瞳は宝石のように透き通る蒼色だった。目を合わせると、まるで瞳に吸い込まれそうな錯覚を起こす。

「授業終わってすぐ来たんだから文句言つなよ」

「文句なんて露ほども言つてないだろ。君は相変わらず瞬時に被害妄想を膨らますのが好きだな。真性のどマゾが……」

「たった一言で真性のマゾヒストかどうかまで分かるとは、流石は音に聞くジャージ魔女」

僕はニツコリと笑顔で魔女誉める。

こんな風に嫌味を言っても全く動じないヤツだということは百も承知だけど、腹立つから取りあえず言える時に言っておく。

「お誉めに預かり光栄だよ斎賀」

うわ、なんかすげえ良い笑顔で返された……。なんかまずい雰囲気になりそうだから話を先に進めておこう。

「で、メール寄越して何の用だよ瀬菜？」

僕は今までの会話をなかったかのような口調で、魔女改め瀬菜と言ひ直す。

魔女検証その二。

その正体は真正銘普通の人間。二年四組在籍の悠木瀬菜。ちなみに悲しいかな、僕のはとこだったりもする。

親戚なのだが、なぜか瀬菜には名字で呼ばれていて、名前を呼ばれたことはあまりない。別にどっちでもいいんだけどさ。

「ん、ああ。少し聞きたいことがあってね。それで呼んだ。それともなにか？　ここで、私とくんずほぐれつイヤラシイことでもしようと思論んでいたのか？」

ああ、男という生き物は汚らわしい、と額を抑えて嘆くフリをする瀬菜。

こいつは一体僕をどうしたいんだろう……？

「で、何の用だよ」

「ふむ。抗体が出来たか……つまらん。まあいい、話を先に進めてやるう。君は都市伝説について詳しいほうかい？」

最近もの凄く耳にするワードがまた飛び出してきた。

今年の流行語大賞にでもなるんじゃないか都市伝説。あ、地域限定だから無理か？

っていつか僕の質問またスルーか、こいつ……。

「都市伝説？　つーっと、あれか。都内の下水道にワニがいるとか、地底湖にネッシーがいるとか、噂話のことだろ。聞いたことあ

るくらいで、詳しかねえ」

「ダウト」

「なんだよ……？」

「私に嘘は通用しないよ。忘れたのか？ 全く君は鶏並みの脳しか持っていないのか？ 三歩歩いたら物事を忘れてしまうのか？ 嘆かわしいねホント」

出た。ジャージ魔女の特殊能力。

これは瀬菜が魔女と呼ばれる理由の一つ。こいつは人の嘘を暴くことが出来るのだ。

昔方法を聞いてみたところ、相手の表情の変化、発声音の変動、言動の不審さ、などから判るわけではないらしい。

なら、どうやって嘘を判別しているのか。

それは臭い、らしい。

他人が嘘をついた瞬間、文字通り『嘘臭い』臭いが発せられるようだ。

これこそ本当かどうか分からないが、瀬菜が他人の嘘を言い当てることは事実。簡単に否定もできない。

そして、他人の嘘を言い当てるとき決まって、

「ダウト」

というワードを口にする。

日本語でなんていう意味だったか。『疑い』だったか。いつそのこと『라이어』とか言えばいいんじゃないか？

「どこまで都市伝説について知っている？ いや、質問を変えよう。最近花月学園で怒っている都市伝説について、どこまで君は知識を得ている？」

瀬菜の鼻が嘘を嗅ぎ分けようとスン、と鳴り、僕の返答を待つ。
ここで嘘言っても仕方ないか。今日も彩乃から強制的に聞かされてるし。

くそう、あまり巻き込まれなくなかったんだけどなあ……。

「……先週起きた飛び降り事件が都市伝説が原因って噂されてること。それに何故か」

「何故か中等部で事件が騒がれていること、か。まああの返答だな。一応合格点はあげておこう」

自分で正解言っんなら初めからそうしろよ。けなされ損じゃんか……。

「この私がわざわざ時間を掛けてメールまでして君を呼んだのは他でもない」

「わざわざ時間を掛けて……。ただ機械類に弱いだけだろ。メールだって僕が何日もかけて教えてやったんじゃない」

凶星を突かれて機嫌を悪くしたらしく、瀬菜は口を軽くとがらせて僕を睨む。

「うるさい、黙れ。私の話が終わってないだろう。ホント君は常識というものがなっていないな。ああ、こんな男がはとこ殿とはホント嘆かわしい」

もうレコード使って録画予約の方法教えてやらんぞ。あとで泣いて頼みにきても知らないからな。

「それとこれとは話しが違う。録画予約は毎日しっかり教えてもらわなければ困る」

「嫌だよ、毎日お前の家に行くなんて。つか、取り説めよ。機械の使い方はあれに全て乗ってるだろ」

「ふ……。あんな文字の羅列ばかり書かれている初心者に優しくないマニュアルなんぞ読むに値しないね。あんなものの解読に時間をかけるのなら、君を呼んだ方が効率はいいだろう。時間も無駄にならずに済む」

要するに、取り説に書かれてる機器類がどれか判別付かず、操作の種類も多すぎてどれがどれだか判らなくなる、と。おばあちゃんがお前。

お前のために毎晩、子供でも理解できるような説明の仕方を考える僕のことも考えて欲しい。大学のプレゼンか！
そんな僕の苦勞を知ってかしらいでか、瀬菜は自由気ままに話を進める。

「今日の朝、学園側からここに手紙が届いてね。学園に噂される都市伝説の一つを解決して欲しいそうだ。最近授業に出席していないから、ちようどいいと思ってね。『翡翠の死神』というらしいんだが、君は知らないか？」

その前に、と僕はちよこんと胸の辺りで手を挙げて質問する。

たった数秒の発言なのに、めちゃくちゃ突っ込みどころあったぞ。まあ、授業に出てないことは知ってたけど。

「どうして都市伝説解決なんて手紙が学園側からお前に届くんだった？」

「うん？ 言ってなかったか？ 都市伝説に限らず、私がこの学園の事件を解決すれば、報酬としてそれに見合った授業の単位をくれるんだよ。授業にあまり出席しない私にとっては好都合だろう」

便宜上テストだけは必ず受けているがね、と瀬菜は不満そうに付け加える。

は？ 事件解決で単位がもらえる？ そんな話し聞いたことないぞ……。でも、待てよ。そういえば、彩乃が最近都市伝説の真相が暴かれて数が減ってきてる、みたいな事さらつと口にしてたような……。

「それ、僕や他の生徒にも適用されるのか？」

「さあ、どうだろうね。そこまでは把握していないし、興味もない。ただ私にとっては有益であるものだから使わせてもらってるだけだ。まあ、言わせてもらつと私以外に事件を解決できるような奴、いないと思うがね」

ちなみに一部生徒は除く、と瀬菜は僕を見据えていやらしく笑う。やばい。完全に今回の事件、僕を関わらせようとしてるぞ……。なんとか切り抜けねば、確実に面倒くさいことになる！

「で、『翡翠の死神』について知ってることは？」

「ない」

「ダウト」

うぐ……。

たった一言だけで嘘を判別するなんて、どんなセンサー持ってたこいつ。

瀬菜は呆れ顔で首を振り、

「君の脳細胞は一体一秒にどれだけ死滅しているのかね。さっきの会話すら忘れてしまつとは……。三歩歩いて物事を忘れる鳥よりも劣るな、君の脳は。ああ、嘆かわしい嘆かわしい」

両手を大きく広げて悲壮感を表した。

嘆かわしい、じゃなくて、お前のやることには関わりたくないんだって……。

え？　じゃあ、こいつ自信に関わらなきゃいいって？　そうもいかないだろ、親戚なんだから……。こいつの親からもよろしくって言われてるし。悲しい血族の宿命だよ、ホント。

僕はしぶしぶ、偶然今日の昼に彩乃から聞いた情報を伝える。

「ほう。この間の飛び降りに『翡翠の死神』が関係していると？　それはまた興味深い話だな。よし、斎賀。明日の夕方までに可能な限り『翡翠の死神』の情報を集めてこい。その色欲に頭が飛んでるイカレ女から聞き出しても案外簡単に集まりそうだな」

あれ？　彩乃から聞いたってことは言っていないぞ。こいつは嘘暴きだけじゃなくて、心まで見透かせるんだろうか？　旧校舍引き籠り学生の癖に……。

「つか待てよ。僕がそれに関わる理由ないだろ」

「斎賀」

「……何だよ」

「いいかいよく聞け。中等部での噂だと第二第三の事件が起きるとも言われている。いいか、事件が起きるかもしれない、ではなく、事件が起きる、と噂されているんだ。可能性ではなく断定だ。それと、学園側から私に直接依頼が来たということは相当マズイ状況にある」

つまり、何だ、どういうことだ。

こいつは　何を言っているんだ。

この間の事件はただの飛び降りだろ。それを誰かが都市伝説に仕立て上げたただけだろ。

そんな可能性は　。

「今回の都市伝説は殺人事件。『翡翠の死神』は殺人鬼だ」

なら、中等部に噂が広がってるっていうことは……。

「鳥の脳よりも劣る君にも分ったようだな。君もこの都市伝説に関わらなければいけない意味がある。中学生　涼莉も、事件に巻き込まれる危険性がある」

第五談 『翡翠の死神』

僕は自宅に帰って夕食を食べた後、パソコンを立ち上げた。起動音がして数秒後、可愛いらしいヒヨ子のデスクトップ画面が表示される。壁紙はよくある夕陽の海だったはずなのに。

……勝手に変えやがったな、あいつ。

ああ、もうこの際どうでもいい。とっとと調べるぞ。

「ていうかなんでこんな意味不明の急展開に発展すんだよ。確かに中学生の間で爆発的に噂が広まったのは怪しいけど……」

僕は静かにぶつくさ言いながら、変更されたデスクトップ画面をそのままに、『翡翠の死神』について検索を始めた。

だが、ものの数分で断念する。検索情報が少なすぎてヒットするものが多すぎた。

検索に引かかるものの大半は『口裂け女』や『怪人赤マント』など全国各地に伝わる超メジャーなものばかり。この地方限定などのローカルなものはヒットしていない。いや、もしかするとヒットしてるかもしれないが、検索情報を逐一全部見ていく根性は僕にない。

なら、検索情報を狭めればいけるかも。

ヒット件数一。

少なっ！ しかもこれ普通のブログじゃなか……。

僕はそのページを見ることはせず、検索ページトップに戻る。

「あ、そういえば！」

自分専用のブックマークに押し出されて気付かなかった。このパソコンにはもう一つブックマークがあるじゃないか。

僕は涼莉がブックマークに集めたサイトを広げる。

たまには役に立ってもらわなければ困るよ、ホント。さて、どのサイトを使おうか……、ん？

僕は都市伝説ブックマークの中に、『フラワームーン』の伝説を追え。仁乃の都市伝説日記』と表記されたサイトを発見した。

これさっきヒットしたやつじゃん……。

たぶん意味はフラワームーン＝花月。つまり、花月学園の都市伝説日記といったところか。

涼莉のブックマークに入っているのなら、と僕はそれをクリックし、ページを開く。表示されたページは、小銀河のように星が散りばめられた背景に、無数の羽が舞い踊っている。正直画面見づらいよ。

どうやらこのページは、中央に日記、端にサイトリンクやカテゴリ、キャラクターのバナーなど、自由にカスタマイズが可能なタイプだった。

ここで僕が注目したのはカテゴリ欄。そこには徒然日記と都市伝説日記と二項目が作られていた。僕は迷うことなく都市伝説日記をクリックする。

書かれていることを見る限りではこれは日記ではなく、都市伝説の紹介のようだ。

そして、中には『済』と赤い文字で、文面を塗りつぶしたものも存在した。

なんじゃこりゃ。都市伝説が本当かどうか、確かめでもしたのか？僕は微かな疑問を浮かべながら、『翡翠の死神』の日記を探す。

「あつた……」

二週間ほど前に更新された日記。

タイトルは、「ついに発覚、『翡翠の死神』の正体」と名付けら

れていた。

僕はそれをクリックし、日記のページを開く。
しかし。

「なんじゃこりゃ」

ページが飛ぶなり、解読不能な文字や記号の羅列が表示される。
下にスクロールさせていくも、そのページ全てにおいて文字化けしていた。何度もページを更新させるも結果は同じ。このページのみが読めなくなっている。

「んだよこれ！ いじめか？ いじめなのか！」

僕はやる気を削がれて、椅子の背もたれにだらしなくもたれ掛かる。

そもそも、どうして僕がこんなことしなきゃいけないんだよ……。
っていうか、あの愚妹が危険に晒されるかも、って曖昧な噂から想像した瀬菜の妄言じゃんか。飛び降り事件が殺人事件って、報道じやそんなこと言ってなかったっの。思春期の学生なら死にたいって思うこと何回もあるだろうよ。それが実行出来るか出来ないかの違いだろ。突破的な自殺だってあるさ……。

心の中でぶつくさ文句を足れていると、

「にーいちゃん、パソコン貸してー！」

と、涼莉が今日もうつつうしいほど元気に登場した。
ホント空気読めないな、この愚妹。

「あ、にーちゃんパソコン使ってんじゃん。どうせ思春期の行動そのまま忠実にエロエロサイトでも閲覧してるんでしょ？ もー、

たまには予想に反した行動くら取って　うわーーーーー！　おかーさん！　にいちやんがエッチなサイト以外のページ見てるーーーーー！

「どんなチクリ方だ！　普通逆だろうが！　もう黙れよお前！」

僕は涼莉の背後へ回り込み、瞬時に見事なコブラツイストを決めてみせた。なんかテレビで見たやつとは違うような気がするけど、問題ない！

ここで母さんに見られたら「妹になにしてんの！」みたく怒鳴られるけど、読書にでも耽っているのか、部屋にやってくる気配はない。

よし、そろそろ決める。

僕はコブラツイストを解き、涼莉を床へうつ伏せに倒しこむ。

そのまま、背中にドスン。涼莉はぐえ、っとカエルが潰れたような声を出した。

僕はトドメと言わんばかりに、倒れた妹の背中に座り込もうと、涼莉を跨いだ瞬間。

メールが届いたよ！

パソコンから聞き慣れない音声が出た。どこか甘ったるい、やけにキーの高い、いわゆる萌え声。

メールを開くよー。

と再度同じ音声の流れ、画面に『イエス／ノー』の選択コマンドが現れた。

僕はすかさずパソコンのマウスを握り、イエスの項目をクリックする。

画面はすぐにデスクトップからメール受信画面へと変わる。

送信者『雛上仁乃』。

本文はこう書かれていた。

『響き渡る鳥の声、穏やかな風の舞う都に私は住まいし者。半分に分れし世界を見届けるもの。赦されない世界が闇に覆われ、タナトスがへべを手にかけて瞬間を私は凝視した。生きる救世主よ。多くの犠牲を強いてもタナトスを滅し、世界を救え。音を読み、奏よ。そして私の世界に変革をもたらせ、私を作り変えろ。真実の姿でなく偽りの姿のままを』

なんじゃこりゃ……。わけわからん。

しかも、どんだけの人数に送信してんだよ。見切れてんぞ。

完全に表示されていないが、ざっと数えただけでも軽く僕のクラスにいる生徒数の半分くらいあった。

「お前の友達も電波なやつがいるんだな……」

「ええ、そんな子いないと思うんだけど」

涼莉はむくりと起き上がって、僕の前に体を割り込ませてきた。パソコンの画面をまじまじと眺め、眉をひそめた。

「これ、本庄ちゃんのハンドルネームだ」

「……誰だつて？」

「本庄ちゃん。クラスメイトの本庄真美。兄ちゃん覚えてないだろうけど、一回だけ家にも来たことあるよ。部屋に貼ってあるプリの子ね」

一回家に来たことが合って、プリクラが部屋に貼ってある子……。ああ、昼間中庭でぶつかった子か。こんな妙チクリンなメール送ってくる子には見えなかったけどな。

「ハンドルネームでメール送ってくるって初めてだよ。携帯に直接送ってくればいいのに」

「こんだけ大量に一斉送信するんなら、パソコンのほうが便利だったんだろうな。チェーンメールっばいし」

何人にこのメールを回せとは書いてなかったけど、たぶんチェーンメールの類いだろう。僕も携帯買ったばかりの時、届いて怖がってた記憶あるなあ……。まあ、今となっては嘘っぱちメールだって知ってるから怖くもなともないけどね。

「あ、そうそう。お前さ、『翡翠の死神』っていう花月学園の都市伝説知ってるか？ 詳細がこのページに載ってたっばいんだけど、消されてんだよ」

僕は涼莉の頭に自分の頭を乗せながら質問。さっき見ていたページを再度画面に表示させた。開いた際にページを更新してみたが、相変わらず文字化けは変わらない。

涼莉は、どれどれ、と僕からマウスを奪い、文字を読みながら画面をスクロールさせていく。

「これってあれだね。飛び降り事件に関係してるって噂のやつでしょ。まさか兄ちゃんの口から女子中学生の間で流行ってる話題が飛び出してくるなんて、夢にも思わなかったよ。明日土砂降りにならなきゃいいなあ」

「失礼な！ たまには僕だって流行に乗るときだってあるっつーの」

兄に対して失礼な態度を取った罰として、顎で頭をゴリゴリしてやる。涼莉は軽く唸っていたが、僕もこいつの髪の毛が顎に擦れて結構痛かった。次の罰には他の手を使おう。

「お前このページに書かれてた内容覚えてねえの？ ちよいちよ

「見てたんだろ？」

「んー。ちよくちよくじゃなくてかなりの頻度で来てたけど、ピンポイントで内容までは覚えてないよ。『翡翠の死神』でしょ？確か、口裂け女系統の派生だったとか何とかで？深夜に鎌持って校内を徘徊してて？遭遇したら魂取られる？らしいよ」

「情報全てクエステヨンマークで固められてんじゃねえか……」

「だって曖昧にしか覚えてないんだもん。そんなに詳細聞きたいんだったら明日聞けばいいじゃん」

今度は僕の頭の中にクエステヨンマークが飛び交った。

明日聞けばいいって誰に？

「え。ブログタイトルで分かんない？今さっきもコンタクトあったのに」

ん？ ブログ名とコンタクト？

このブログの名前は『フラワームーンの伝説を追え。仁乃の都市伝説日記』。

さっきあったコンタクトつーとメールか……。送信者は『雛上仁乃』。

ああ、そういうことか！

僕は髪の毛が顎に食い込まない程度の力で、分かったぞ、と涼莉の頭をグリグリする。

「ならお前と同じクラスだな。じゃあ明日午前中くらいに行くから、そんなときよろしく」

午前中ならば瀬菜から勝手に取りつけさせられた時間にも間に合う。

僕は机の上に置いてあった携帯を掴み、メール画面を表示させ

る。一応、調べた内容と鍵となる人物の情報だけ瀬菜に教えておく。これならあいつも自分で調べられることが増えるはずだ。インターネットじゃなくて、本とかのアナログでしか調べごと出来ないっていうのはこのご時世不利だよな……。

「よし、送信完了つと。……ほら持つて行つていいぞ」

得物を刈るような視線で僕を見つめていた涼莉に、パソコンを差し出す。すると、恋敵から愛しい人を取り返したかの如くパソコンを抱きしめ、脱兎のごとく部屋から退散していった。

やれやれだ……。

こうして僕は『翡翠の死神』の情報を持つ本庄真美に接触する機会を得た。

しかし、次の日。それは叶わないことだったと、思い知らされることとなる。

第六談 死の衝撃

翌日、僕はいつも通りの制服姿に、薄っぺらい通学用の肩掛けカバンを持ち、通学路歩いていた。ポケットに両手をつ込んで、あくびをかみ殺す。このままゆっくり歩いていても、始業チャイムには十分すぎるほど余裕を持って教室に辿りつける。近くにいた数人の僕と同じ制服を着た生徒たちも眠たそうに、ゆっくりと余裕たっぷりに歩いている。

だが、今日ばかりはそんないつもの登校風景に違和感を覚えた。生田や彩乃にも言われることなのだけど、僕は歩くスピードが速いらしい。ただ歩幅が大きいだけなんだけど。

そんな僕は自慢じゃないけれど、歩いている人を後ろから抜き去ることはあっても、後ろから抜き去られるということはあまりない。

なのだが、今日はやたら後ろから同じ学校の生徒に抜き去られる理由は簡単。彼ら彼女らが走る、または早歩きで学校に向かっていくからに他ならない。そんなに急いでどうするのやら。

一つ、皆執拗に携帯を触っているのがちょっと気になった。

僕は正門をくぐると、登校したばかりの生徒が自分たちの下駄箱ではなく、中庭方面へ向かって足を進めているのが目に入る。

僕も流れに身を任せ中庭へと足を運ぶと、途中で生田の姿を発見した。

やはり携帯を触っていた生田を捕まえて、状況を聞きだす。

「生田、どうなってんだこれ？」

「おお、遥真。俺もさっきメールで知ったんだけどな。また、飛び降りらしいぜ。それも前と同じ場所で……」

眩暈がした。

足がもつれて膝をつきそうになったが、なんとか堪える。

「大丈夫かよ、遥真」

「大丈夫。僕らも……行こう」

野次馬根性ではないけれど、早く現場に行かなければいけない。
なぜかそんな気がした。

中庭はやはり生徒でごった返していた。中心部の様子は背伸びを
してみても全く窺えない。その集まった生徒たちを、「あなたたち
すぐに教室へ戻りなさい！」と教師たちが中心部から外から追い返
す声が聞こえてくる。

どうやら本当に事件は起きているらしい。

警察の姿もちらはら窺える。パトカーは裏口から入ったようだ。

「本庄ちゃん！」

生徒たちの一番奥から、聞き覚えのある声が響いた。

それも悲痛な叫び声。

僕は背筋に悪寒を感じながらも、群れる生徒たちをかき分けて行
く。

「ちょっと、ちょっとゴメン。悪い、通してくれ！」

視界が開けた。

一番初めに網膜へと焼き付いたのは、すでに浅黒くなっている血
痕の数々。

昨日彩乃と座っていたベンチの周囲一帯を隠すようにブルーシー

トが敷かれていたが、壁や遠く四方へ飛び散った血痕までは隠し切れていなかった。

眩暈がする。

飛び散った血痕、肉片、脳髓、ひしゃげた体、つぶれた頭、飛び出した眼球、二度と起き上がることはない……死体。

僕の脳裏を最悪なイメージが通過していく。

胃の中から胃液がせり上がってくるのを感じ、僕は早い深呼吸でそれを飲み込むように押さえつける。

落ち着け。これは違う。

コレハ、アイツジャナイ。

「本庄ちゃん、本庄ちゃん！」

涼莉の泣き叫ぶような悲鳴が再度僕の鼓膜を震わせた。

はっ、と僕は意識を現実世界へと引き戻す。

特別ブルーシートが幾枚も重なって膨らんでいる場所の手前、涼莉と一緒にいる二人の女子中学生が教師によって体を抱きかかえるように押さえつけられていた。

たぶん教師が体を押さえていないと、ブルーシートを捲って死体を露わにする可能性があるんだろう。それに警察が調べるまで、現場を保存しておく必要もある。

「涼莉！」

僕は教師の拘束から逃れようとする涼莉に駆けよる。

その際、教師の一人に、入っては駄目だ！ と行く手を遮られそうになったが、右手で押しのけて振り払う。

「涼莉、落ち着け！ 涼莉！ 僕の目を見る！」

狂乱しかけている涼莉の顔を両手で固定した。途中、したたか顔や体を殴られたが、今はどうでもいい。

僕は固定した涼莉の顔に、自分の顔を密着させるように近づけた。それでも近づく僕を敵とみなしたのか、噛みつかんばかりに犬歯を覗かせてくる。

僕は手っ取り早い手段。短いインターバルだったが、助走をつけ涼莉の額に自分の額を思いつきりぶつけた。

ゴチン、と鈍い音がした後、グルグル回っていた涼莉の視線がその時初めて僕の視線と交わる。

「兄……ちゃん？」

さっきまで叫んでいたものとは違う、その絞り出した消え入りそうな小さな声は悲痛に震えていた。

そして肺に溜まった空気を咳と共に吐き出し、カクン、とまるでマリオネットの糸を切ったかのように、力なく僕の体に体重を預けてくる。

気絶したか……。

僕は意識を失った涼莉をお姫様抱っこの要領で抱え上げると、そのまま保健室へと向かった。

第七談 瀬菜の仮定

「涼莉の様子はどうだい？」

僕は驚いて、座っている椅子から転げ落ちそうになった。

保健室のベッドで寝ている涼莉に付き添っていると、いつの間にか瀬菜が背後に立っている。相変わらずのジャージ姿で。

くそう、涼莉の髪の毛を撫でていたのを完璧に見られた……。

保健室にあるベッドの周りは病院と同じくカーテンで仕切りを作ることが出来、僕は涼莉を寝かせた後、完全にカーテンで外部からの視覚を遮断していた。

僕は取り繕うように、

「き、急に現れるなよ、心臓が止まったらどうすんだ」

「面白いことを言うな斎賀。こんなことで心臓が止まっていたら、君は人生で何度命を落としているんだい？」

心肺停止でも即行で蘇生させれば後遺症もなく意識取り戻せるっての。まあ、難しいけど。

「涼莉なら気にするな。ただショックで意識失っただけだよ。追牧先生がもう少ししたら目覚ますだろうって」

「その追牧保健医はどこへ行っただ？」

「職員会議があるって、涼莉診てくれてすぐに職員室へ走って行った」

追牧先生は余裕そうな表情をしていたけど、内面はやっぱり焦っていたのかもしれないな。

保健室出る前に、デスクにぶつかって薬箱ぶちまけたし……。後

片付けしたの僕だけど。

「そうか、それならいい。それと、もう一つ」

と瀬菜は僕の顔を覗き込む。

近い、近い！

僕は立ちあがって後ろに距離を取ろうとしたが、ベッドに阻まれた。

「……君は本当にイヤシイことしか頭にないのかね。いくらここが保健室だからって、さすがに実の妹、私にとっても親戚の真横でそのような行為に走るわけがないだろう」

なら、ここに涼莉がいなかったらそういう行為に走ってたのか？

「そんなわけあるか！ 私は単純に君の精神状態を案じたただけだ。いいか、親戚として案じているだけだからな。勘違いするなよ！」

ツンデレ……？ ここでツンデレですか？

「あー、はいはい。ちゃんと分ってますよ、はとこ殿。それで？僕の精神状態を案じてくれてるって？ いったいぜんたいどういう理屈で？」

「しらばつくれるな。少年A君？」

「は……？」

「ピンとこないか？ なら、目撃者A君と呼び変えればいいか？」

目撃者……。

透き通る蒼い目で瀬菜は僕を見据える。

瀬菜の何もかも見透かしたような顔と声に、僕は悪寒のようなも

のを感じた。

いや、これは悪寒じゃない。焦りと動揺からくる冷や汗……。たぶん額にも脂汗が滲んでいる。

たった一言で、ここまでの変化を引き起こされるとは思っていなかった。

僕は瀬菜の蒼い瞳から視線を離すことが出来ない。

「心配するな。私はあんなことを知ったところで君の見解を変えたりしない。何度も言わすな、私はただ君の精神状態を案じているだけだ。今回はブルーシートがあつたものの間接的に君はあの現場を」

「……お前何意味不明なこと言つてんだよ？ あんなこと？ 僕の見解？ お前は僕の何を知つてるつていうんだ？」

「全部知つてる。過去に君が遭遇した出来事も。なぜ嫌々ながら私の頼みに乗つてくれているのかも、ね」

自分の呼吸が荒くなり、心臓の鼓動が速くなる。

「君は前の飛び降り事件、本当の第一発見者。そして、の現場目撃者だろう？」

「っ……………！」

顔から血の気が引いていくのを感じ取る。同時に過呼吸気味になつてきたのか、頭が重く、クラクラし始めた。

僕は髪をかきあげるように、額を右手で押さえる。

確かに僕はあいつの飛び降りた現場のすぐ近くにいた。

もちろん見ている。飛び降りる瞬間から、地面に落下するまで全て。

けど、この情報は警察やほんの一部の教師しか知らないはずなのに……。警察がプライバシーの保護を図ったとかで、家族にも話さ

れてないはずの情報なのになぜ……。

「決まっているだろう。私もその場所に居合わせたからだ」

「は……？」

たぶん僕はものすごく素っ頓狂な声を出して、拍子抜けした間抜け面をしていることだろう。でも、それだけ瀬菜の発言は想定外だった。

「詳しく言おうか？ 三か月前の深夜二時、花月学園高等部棟屋上から相沢侑子が飛び降りた際、私も現場近くからそれを目撃している。加えて言うならば 屋上の手すり付近にいたもう一人も目撃している」

「っ！」

僕は今度こそ反射的に手を伸ばし、瀬菜の両肩を掴む。

「お前もあいつを見たのか！ 顔は？ 顔は見たか？」

「その前に手を離せ！ 爪が食い込んで痛い！」

「わ、悪い……」

落ち着け、落ち着け。

このままじゃ本当に情緒不安定になって、情報が手に入らなくなる……。

深呼吸。深呼吸。深呼吸。

僕は瀬菜の肩から手を離し、再び椅子に腰かけた。

瀬菜は乱れたジャージの襟首を直しながら、

「さすがの私もあの暗さで屋上にいる人物の顔は見えてないよ。ただ、君と私が屋上にいたもう一人を目撃しているということは、

事件という線が強まったな。今回の件も含めて、な」

「待てよ。今回のも本当に事件性があるっていつのか？ この間
はただお前の推測を僕に話しただけだろ」

「君は本当に阿保だな。昨日『翡翠の死神』をしつかり調べたのか？」

「調べたよ。抽象過ぎてメジャーどころしかヒットしなかった。
検索情報狭めたらヒットは一個だけ。それも個人サイトに載ってた
やつだ。本当に噂になってんだろ？」

涼莉に絡まれた後、もう一時間ほど『翡翠の死神』について検索
してみたのだが、今言った通りの結果。

世界中のネットワークを通して、花月高校で都市伝説されてい
ても、ヒットは僅か一つだった。

しかも文字化けは結局直らなかったし……。

「そこまで行きついていてどうして結末に辿りつかないかが、私
には理解しがたい……。いいか。花月学園のみで急激に流行る都市
伝説。それに加え検索件数一件。そのホームページの主は？」

「『雛上仁乃』、本庄真美……」

「イコール！」

瀬菜は僕の鼻先にビシッと指先を突き付け、

「本庄真美は『翡翠の死神』を花月学園中等部に流行らせた張本
人。発信源だ。それを前の相沢侑子の事件と関連させて流している。
つまり 本庄真美は私たちと同じ目撃者。且つ、私たちとは違い、
屋上にいたもう一人の顔を見ている可能性がある。その口封じで殺
されたと考えるのが妥当だ」

途中まで納得していたが、最後のは無理やりすぎと思う。

それに、矛盾点多い。

まず、本庄真美があいつを殺した犯人を目撃したのなら、なぜ警察に通報しなかったのか。

「それは簡単だ。通報したにも関わらず、逮捕されなかった場合を考える。犯人が腹いせに通報した輩を探し出そうとでもしたら、自分に危害が加わる恐れがある。そうでなくても犯人が逮捕される可能性は極めて低い。証拠は自分の目撃情報だけだからな。それに、最悪　自分が犯人扱いされかねない」

正直、最後の言葉には心臓が跳ねた。

まさに、僕があいつの落下現場に居合わせたのを他人に知られたくない理由の一つがそれ、だからだ……。僕の友達は、僕を疑うやつらじゃないって分っている。分っているけど、不安は消えない。

いや、今は気を取り直して話を戻そう。

二つ目、もし今回の飛び降り事件も殺人と言うのなら、殺された時期が遅すぎる。

あいつが死んだのは半年前だ。

「本庄真美が犯人を目撃したとしても、犯人が彼女を目撃したとは限らない。ここ数日の間に犯人は、自分があのと目撃されたのだと知ったんだろう。それで自分の犯行をバラされる前に事件を起こした」

そんなもんなんだろうか……。

まあ、言われてみれば五年越しの計画殺人とかテレビで取り上げられてることもあるしな。

なら三つ目。これは今までの討論とは通じないはずだ。

どうして最近になって『翡翠の死神』を都市伝説として流したのか。

「知らん」

「うおい、中途半端すぎるだろ！」

思わず、お決まりの手振りまで入れて突っ込んだじゃないか！

ここまで来たら最後まで論破してくれると思うだろ、普通！
さっきまでの焦慮と緊張感が完全に薄れたぞ……。

瀬菜は腕を組み、唇を尖らす。

「君の疑問はもつともだが、これ以上は情報が足りなさすぎる。
いくら私でもピースがなければパズルは完成させられない」

「じゃあこれからの主な行動は本庄真美関連の情報収集ってことか」

「その通りだよ斎賀。頭に上った血が下がったようだね。なら行動は早い方がいい。まずは中等部の」

瀬菜は全てを言いきる前に口を閉ざし、カーテンに冷たい視線を送る。

そして、そのままカーテンを掴み、乱暴にスライドさせた。

「用件があるのなら、盗み聞きしてないで入ってきたらどうだ？」

カーテンの向こうには……誰もいない？ いや、瀬菜の視線は下を向いている。

瀬菜の体で邪魔されているが、僕は目一杯体を逸らして目視しようとした。

あ、やば。

僕はそのまま地球の重力に導かれ、椅子から滑り落ちた。
肩に鈍い痛みが走ったけれども、障害物を外れ、盗み聞き犯の正

体が視界に入る。

「彩乃？」

瀬菜の足元でぶるぶる震えている彩乃。

「おい、黙っていないで用件を言ったらどうかね？ ほら、早く言え。盗み聞きなんて無粋な真似をする愚民風情が。私が君のような愚民と会話している苦勞を悟って、とつと口を開け！」

瀬菜が詰めより、彩乃へ覆いかぶさるように顔を上から覗き込む。その際、長い髪の毛がだらんと垂れ下がり、彩乃の顔を覆い隠した。僕はその様子を横目に、とりあえず体を起こし、もう一度椅子に腰かける。

「助けてよ、遥！」

彩乃は恐怖に耐えかねたのか、瀬菜の髪の毛を払いのけ、這うように僕の足へ縋りついてきた。

「ねえ、あの女の子誰よ！ あたしを放っておいてあんなだっさいジャージ着てる子と会ってるなんて！ 信じられない！」

毎度思っけど、僕はお前の中でどのポジションにいたんだよ！それに、だっさいジャージって、一応あれ学校指定のジャージだからな……。

彩乃派瀬菜から身を守るように、僕の後ろへ回り込み、盾を作る。吐息が首筋に当たってくすぐつたい。

「おい、斎賀から離れたまえよ愚民」

腕を組み直して、足で地面をリズムよく叩く瀬菜。

表情は至って普通なのだが、滲みでている黒いオーラが怖い。

対する彩乃は僕にしがみ付く形。どんな顔しているのか窺えないけれども、瀬菜の眉が度々ピクピク動いていることからして、挑発まがいのことをしているんだろう。

「私が遥から離れなきゃいけない理由なんてないじゃない。それよりあなた誰よ？ 私たちの恋路に茶々入れないでもらえるかな！」

「恋路い？ 君たちのどこに恋愛があるというのかね？ 頭が沸いているのかどうか知らんが、斎賀と話しているところを邪魔したのは君だろっ愚民！」

「さつきから愚民愚民言わないでくれる？ 私には柏樹彩乃っていうパパから貰った大切な名前があるんだけど！」

「愚民の名前などどうでもいい！ 早く斎賀を離れたまえ！」

瀬菜が僕の腕を掴んで引っ張る。

少し僕の腰が椅子から浮いたあたりで、彩乃も僕の胸に手を回して引っ張り返す。

ちょ……、腕抜ける！ 肋骨折れる！

二人とも女子とは思えないほどの力を発揮していた。そこに。

子供のピンチに助けにくるヒーローが登場した。

「ちょっとあなたたちここは保健室よ。静かにしなさい！」

白衣姿の保健医、追牧先生が鬼の形相を浮かべ仁王立ちで構えていた。

そのまま僕らに歩み寄ると、まず瀬菜の襟首を掴んで後ろに放り投げ、

「ちよつと……、先生、ストップ……！ 私悪くない！」

と再度ぶるぶる震えだした彩乃にアイアンクローを決めて、僕から引き剥がす。

そして、そのまま女子二人を引きずるように保健室から放り出した。

「斎賀君も、涼莉ちゃんが寝てるんだから静かにしなきゃ駄目よ」「すいません。以後気をつけます」

しかし、これだけ騒いでも起きない妹には呆れる……。そういえば、やかましい目覚ましが三十分鳴り続けても起きなかったっけ。

「それとね。さっきの職員会議で今日は緊急休校が決まったから、生徒の皆は速やかに下校するように」

「……分りました。じゃあ、涼莉おぶって帰ります」

「あら、お母さんは？」

「今の時間帯はパートに出てるんでいないんですよ」

「そう。なら、涼莉ちゃんが起きたら私が家まで送ってあげるわ。ついでにカウンセリングもしておくから、斎賀君はあの二人を連れてもう帰りなさい」

あの二人連れて……？ なだめながら帰路につけと？ 外からまだ言い争いが聞こえてくる。

僕はかつてないほど苦々しい苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、涼莉のことよろしくお願いします」

「頑張つて。あなたの平穩はあなた次第よ」

追牧先生は僕の肩に手を置き、神妙に頷いた。

第八談 魔女の正体

「ちよつと付いてこないでよ！ あたしと遥は今から秘密の花園へ向かうんだから」

「頭が沸いていると思つたら、とんだ妄想壁もあるようだな。噂にたがわない狂乱っぷりには頭が下がるよ。それに、付いてきているのはそつちだ愚民。私と斎賀はこれから用がある」

「そんなジャージ着て街を歩くなんて、ありえない！ あんたこそ頭の中可哀想なことになつてゐるんじゃないの？ こんなのに付き纏われる遥が可哀想……」

保健室を出てからどのくらい時間が経つたのだろう。

もう数時間くらいすぎたろうか？

あれ？ 十数分しか経つてない？

休むことなく憎まれ口を叩き合う二人。

それに挟まれ、氣力低下中の僕。もう抜け殻になつてきた……。

女つて怖い……。

え、逃げればいいつて？ できれば僕だつてそうしたいさ。

でも、僕の両腕はホルドされているんだよ。瀬菜は右腕、彩乃は左腕にがつちり腕を絡めて離そうとしない。

傍から見るともててるようにも見えるんだろうな、あははは。

でも、誰が変わつて…… ホント。

ていうか何で瀬菜まで腕絡ませてんだよ……。

「遥だつてあなたみたいなジャージ女と並んで歩きたくないです

ー！ 恥ずかしいすぎて死んじゃうもん！」

「……………」

彩乃のジャージを連発して馬鹿にする言葉にキレたのか、瀬菜は

僕の腕をへし折るかの如く力を入れる。しかし、すぐに力を抜き、僕の腕を開放した。

すると次の瞬間。

瀬菜はジャージの上着を脱ぎ始めた。

僕は反射的に目を逸らす。

白いお腹がチラッと見えた。腹チラ……。

「ちよつと、待ちなさいよ！　こんな公然の場でストリップ劇場ええ？」

どこか引くような彩乃の驚いた声に、僕は視線を戻した。

ええ？

僕の視界に飛び込んできたのは、真っ白なシャツに赤いリボン、赤と緑のギンガムチェックスカート姿の瀬菜だった。

まさかのジャージイン制服。しかもジャージの下に着ていたにも関わらず、目立った皺が無い。

魔女パワーか……？

「これなら文句は無いだろう？」

瀬菜は彩乃にこれで文句はないだろう、と勝ち誇った表情を向ける。

確かに、もしこれで彩乃が服装に関して文句を言おうものなら自分を否定することになる。

全く同じ制服だし。

「ほら、行くぞ斎賀。私は今日中にもう少し話をまとめておきたい」

「うおっ」

瀬菜は無意識なのか嫌がらせなのか、僕の手を握るなり、また歩き始めた。

「ちよつとちよつと、あたしを置いていかないでよ！ それにこつちつて旧校舍じゃん。危ないって！」

「魔女がいるからか？」

瀬菜が振り向かず聞く。

「そうだよ！ 花月学園都市伝説の一つ、紅の魔女。魔女に認められなければヒドイ目に遭わされるってもっぱらの噂だよ！ まあ、いつも会えるってわけじゃないけど」

ヒドイ目に遭わされるって……。それ知ってて昨日僕を誘ったのかよ、彩乃……。

僕はヒドイ目に遭わされることはないだろうけどさ。

「愚民よ。君は随分都市伝説に御執着しているようだな」

「え？ う、うん。都市伝説や噂の類いは聞くのも確認しに行くのも好きだけど……。それが？」

それを聞いた途端瀬菜は振り返り、口元に薄ら笑みを浮かべ、

「なら、この機会に諸手を上げて喜ぶといい。特別だ。魔女に会わせてやろう」

「どうしてこんな展開に……」

「おい、まだ質問に答えていないぞ。早く答えろ、この愚図愚民が。魔女に会わせてやった私への恩義が全く感じられない」

「この性悪魔女！」

「うるさい、愚民。あの恥ずかしい姿を公開されたくなくば、持ちつる全ての情報を余すことなく私に寄越せ！」

現在、彩乃は正座して俯いている。そんな彩乃に、あの紫色の椅子に座って瀬菜が超上から目線で質問攻め。手には何やら写真のようないものが。

それを脅しネタに、かれこれ一時間は質問攻めに行っている。

どうしてこうなったのかは、まあ、二時間くらい前に遡る……はず。

僕たち三人は瀬菜のテリトリーである旧校舎の図書室に場所を移動させた。

どこかそわそわした感じの彩乃に、未だ薄ら笑いを浮かべている瀬菜。

間違いなく瀬菜は自分の希望通りの展開にはならず、瀬菜は逆に思い描いたイメージ通りになることだろう。

図書室へ足を踏み入れると、やはり古書のどこか懐かしいような埃っぽい匂いが鼻を通りぬける。

「ねえ、遥。遥はここに来たことあるの？」

「まあ、何回かは」

「そうなんだ、ふーん」

どこか不機嫌そうに彩乃は唇を尖らせる。

あれー。どっか不快にさせるワードあったかなあ？

「着いたぞ」

瀬菜が僕の左腕にくっついていて彩乃を引き剥がし、紫色の椅子の前に引っ張っていく。

「痛い、痛いってば！ 引っ張らないでよ！」

「うるさい愚民が。ほら、待ちかねた魔女とのご対面だ」

「え？」

その言葉に彩乃は目をぱちぱちさせ、周囲三百六十度見渡す。次いでもう一周。

もちろん変化があるわけではない。あれ？ と首を傾げる。

「いないじゃない。どこに魔女がいるのよ？」

「いるだろ、ここに」

「どこよ？」

「君は本当に理解力がないな愚民。仕方ない。斎賀、そこにある帽子を取ってくれたまえ」

僕は指さされた方向に目を向ける。そっちには本棚しかないんだけど……ってあれか。

やけに先端が長く尖った、いわゆるとんがり帽子が、本棚から出っ張った本に引っ掛けて会った。

意外と本大事にしてないんだな、あいつ。

僕はとんがり帽子を手にとると、そのままフリスビーの要領で投げ……ことはせず、椅子まで持って行った。

たぶん、飛距離が足りなくて床に落ちでもしたら激怒される……。瀬菜は僕に一言礼をいうと、とんがり帽子を被り、椅子に座って足を組んだ。

「ようこそ、はじめまして。魔女のいる図書室へ。私が都市伝説『紅の魔女』こと悠木瀬菜だ。以後よろしく……したくないが、よ

「ろしく」

今度こそ彩乃は言葉を失くした……と思ったが、

[illegible]

図書室どころか旧校舎のワンフロア中に響き渡るくらいの絶叫を
発した。

伝説と称されている魔女の真相、大元が自分と同級生の、それもさつきまで言い争っていた少女。都市伝説好きな彩乃にとつては、裏切られたような気分だろう。例えるならば、信じていた恋人に借金を保証人にされた揚句、他に恋人を作つて逃げられたような感じ。……あれ？　上手くない？　ま、まあ、それほどシヨックだったってこと。

彩乃は目を丸くし、頬を手で覆い、ワナワナ震えている。

「このくらいで衝撃を走らせるな愚民が。他にもつと詐欺まがいな伝説はあるだろう。『紅の魔女』の真相が、この部屋でゆっくり読書をしたいがために中学生共を利用して紆余曲折流させた、なんて可愛いものだろう。まあ、斎賀以外で魔女の正体を知った最初の人間になったことを誇るんだな愚民」

「自分勝手スキル発動してるし！　って、斎賀以外で正体を知った最初の人間？え？　遥はずっと前から正体知ってたの？　昼聞いた時知らないって言ってたよね？　どうして嘘ついたの？　あたしに隠さなきゃいけないことだったの？！」

うわー、僕に矛先向いたー！

どうして彩乃に魔女の正体を隠したかつて？ そんなの決まってるだろ。波長が合わなさそうだったからだよ……。

片や都市伝説大好き子で、片や都市伝説否定解決屋。まず、都

市伝説ってワードが出ただけで言い争いそうだし。いや、もう言い争ってるか……。

僕はジト目で彩乃を見ると、ため息を一つついた。
すると彩乃は僕の制服の襟首を掴み、

「あたしというものがあひながら、何でこんな意味不明なジャー
ジ女と密会してるの？ あたしのお誘い断ったのもこのジャージ女
と会ったためだったの？！」

少し涙目になりながら僕を問いたです。

うーあー。面倒くさい展開になってきたー。

僕は自分の顔の前で小さくバンザイするポーズを取り、彩乃の動きを静止する。この場合どんな言い訳をすれば解決になるのか。僕は頭をフル回転させる。

はっ、そうか！

「ほらあれだ彩乃！ 僕はお前の安全を考えてだな」

「安全って、性格と口が物凄く悪いけどこの子普通の人間じゃん
！ まさか遙……」

彩乃は何を思いついたのか、目を大きく見開き、絶望に満ちた表情で、

「このジャージ女と寝たの！？」

「んなわけあるか、この愚民が！」

彩乃の爆弾発言にも成りうる発言を、瀬奈は背中に蹴りを入れて反応した。

背中を蹴られたことによって前方に強い力が働いた彩乃は、僕に全体重をあずける形になる。蹴りの勢いに加え、彩乃の全体重の負

荷は、さすがの僕には耐え切れない。

彩乃が僕の上に覆いかぶさる形で、床に倒れ込んだ。
頭打った……。

「痛ったーい……。遙大丈夫？」

あんまり大丈夫じゃない。たぶんコブになった、とも言えず。僕は涙目になりながら、大丈夫、と首を縦に降る。

彩乃は僕の無事を確認すると、すぐに僕の上から退くことはせず、なぜか抱きついてきた。

本当に意味が分らない……。

パシャ！

なぜか眩しい光と共にシャッター音。

僕は頭を起して音のしたほうを見やる。

瀬奈が、どこから取り出したのか、っていうか今でもあったのか。その白い手にポラロイドカメラを持っていた。

カメラ正面からジーっと写真が流れてくる。

「おい」

「なんだね斎賀？」

「どんなシャッターチャンスだよ！」

「か、勘違いするな、君ではないよ。私が君なんて撮ってどうするんだ」

僕じゃないって……、なら彩乃しかいないじゃん。

僕が怪訝な視線を送ると、瀬菜は浮かび終えた写真を僕に見えるよう差し出した。

ぶっ！

思いつきり吹き出してしまった。純情すぎる僕……。

その写真には、当然僕と彩乃が写っている。僕は苦痛に顔歪めてたけど……。

彩乃は、蹴り飛ばされた衝撃のせいか、ものの見事にスカートがめくれ上がっているそこから、薄い水色の下着がバッチリ顔を覗かせていた。

確かにシャッターチャンスではあるけれど、女子が女子の下着姿を写真に残すってのは変だろ。しかも、瀬菜ならなおさらのこ

うわー！ 瀬菜がめっちゃいい顔してる！

瀬菜は椅子から立ち上がるなり、僕の上に乗ったままの彩乃を引き剥がした。

尻もちをついた彩乃は、小さいうめき声を上げて瀬菜を睨む。

「おい愚民。今から包み隠さず一切の嘘偽りなく私の質問に答える。もし私の機嫌を損ねるようなことがあれば、この写真を全校にばら撒く」

「ふざけないで。どうしてあたしがそんな尋問みたいなことされなきゃいけないのよ！ それにその写真あたしの顔写ってないじゃない。遥の顔はバッチリ写ってるけど。そんなのばら撒いたところで、あたしに害は無いわよ。ま、まさかあなた遥を人質に……！」

「ふん。そこはほらあれだ。アイ……コラ？ でどうとでもなる。斎賀の顔を隠し、愚民の顔を作ることくらい造作もない」

腕を組んで高らかに言い放つ。

おおー。機械音痴の癖によくアイコラなんて言葉知ってたな。使どころも合ってるし。ちょっとは成長したってことが、うんうん。まあ、少しもったけれど、合格点だ。

僕が親心にも似た感情で感心していると、

「遥を人質に取られた……。こんな写真ばら撒かれたら、あたしとの未来に障害が……」

地面に手を付け、跪くように頭を垂れていた。

将来設計がどうかぶつぶつ言っているが、小さすぎてよく聞き取れない。

そんな失意の中にいる彩乃に瀬菜は、

「私の質問に答えればこの写真は焼却処分してやる。三秒以内に答える。イエスかノーか」

「答えるわよ！」

コンマ二秒くらいのスピードだった。

彩乃を突き動かすものって一体何なんだろう……。

「早く質問してきなさいよ！ 何？ あたしのスリーサイズから初キッスの相手、遥の私物の所持数、盗聴器記録まで包み隠さず話せばいいんですよ？」

「……そんなもの質問するわけないだろう。私が聞きたいのは『翡翠の死神』のことだ。本当に発想まで愚かしいな」

ち、ちよつと待て。会話の中にさらつと僕のプライバシー侵害暴露がなかったか？！

「ない」

「ないよ」

あつさり否定された。

完全に僕、蚊帳の外になってないか……？ 結構名前出てるから、話しの中心にいると思っただけ……。

瀬菜と彩乃はジト目の僕を無視して攻防戦を始めた。

とは言っても彩乃は質問に答えていくだけで写真は処分できる。それに瀬菜だって『翡翠の死神』についての情報はある程度持っている。そこまで時間はかからないだろう。

「最初の質問だ。『翡翠の死神』を見たことは？」

「あたしはないわよ。友達でそれっぽいを見たって聞いたことはあるけど。あとは中等部の子たちがよく目撃してるって話し」

「ほう。なら正体は掴めているのか？」

「ちよつと！ 自分で真実を暴こうともしないで、苦労もなしに正体だけ聞こうっての？ そんなの都市伝説ファンに対しての侮辱行為」

瀬菜は視線を逸らして、手に持つ写真をひらひら仰いでみせる。

弱みを見せつけられ悔しそうに口を閉ざした彩乃は、僕の顔を一瞥すると再び質問の返答に移った。

「……正体はまだ分ってないわ。中等部高等部に限らず都市伝説ファンは多いから、普通早い段階で正体が判明するはずなんだけど……。出現するのが深夜って話だから、中々思うように調査が出来ないの。夜の学校に入るのだけでも一苦労よ」

「つまり、何も分ってないわけか。使えん愚民だ」

ため息をついて呆れたように首を横に降る。

その割に目を細めたり口元に手を当てたりと、少しだけ妙な仕草を繰り返していた。どこか引つかかる部分でもあったのだろうか。単純に次聞きだすことを考えていただけかもしれないが。

「じゃあ最後の質問だ」

え……、もう最後なのか。もっと他のことも根掘り葉掘り聞くとばかり思っていたけど。確かにこれ以上質問を続けても、そこまで有益な情報を得られないような気もする。昨日も偶発的に情報をくれてたし。現に『翡翠の死神』の正体は掴んでいないとはつきり言っている。

未だにきちんとした姿勢で正座している彩乃は、足が痺れてきたのか両足をもぞもぞ動かしていた。

「今回の飛び降り事件と『翡翠の死神』の関連性の可能性は？」

「……分らないけど、否定はしない」

「そうか」

一言呟くなり、瀬菜は立ち上がり、彩乃の背後に回り込む。

そして、そのまま彩乃の襟首を右手で掴み、出入り口へ引き摺って行く。

「ちょ、やめて、首！ 首絞まるからっ！」

今回は喉に制服が食い込まないよう、必死に指で襟元を掴んでいる。

昨日今日だけで何度襟首掴まれてるんだろう……。不憫な奴。

ずるずる引き摺られてスカートは下にずり下がってくるわ、ブラウスは引っ張られて脱げそうになるわで、大変な彩乃。もがくというか、制服を脱げないよう調節しているようだった。

ん？ 見えてない見えてない。僕はちゃんと視線を外しているよ？ それよりも、あれだけ引っ張られて伸びも破れもしない花月学園の制服は凄いと思う。

貸出力ウンターまで瀬菜が辿りつく動きを止め、空いている左手で扉を開く。

「用は済んだ。もう帰れ。あと私の正体は他言無用だからな。もし喋るようなら、堂々と表を歩けないようにしてやる」

「扱いひどすぎない！　せつかく質問に答えてあげたのに！　つていうか写真渡しなさいよ！」

「うるさい愚民」

瀬菜は右手で掴んでいた襟首を開放し、おもむろに後ろから両手で彩乃の体を抱く形を取る。両手を胸の下に回し、しっかりホルドしていた。

あ、展開読めた。

瀬菜は抱きついた少女の体を遠心力で大きく回し、図書室の外へ放り投げた。あの華奢な体のどこに、女の子とはいえ人一人投げられる力があるのか。

まあ、距離的にはそんなに飛ばしていないけれど。

彩乃は図書室から、ちょうど勉強机を二つ横に並べたくらいの距離に滑り落ちた。しかも顔から。体勢的には力を抜いてうつ伏せに寝転がった状態から、お尻を突き出したような状態。

その突き出た彩乃のお尻の上に瀬菜は写真を置き、一発風を切るスピードで写真ごとお尻を叩いた。

「痛い！」

体をビクツつとさせ、短い苦痛の声を上げる彩乃。そんな彩乃に瀬菜は一瞥もくれず図書室に戻り、扉を閉めた。そして、間髪いれず内側から鍵を掛ける。これで完全に邪魔者を排除に成功した。だが、すぐさま向こう側から扉をドンドン叩かれる。

「放り投げるってありえないでしょ！　まさか本当に閉め出し？　ちよっと聞いているの！　遥助けてー！」

閉め出された方からすると理由を聞きたくないのは当然のこと。

しかも理由なく理不尽な展開になればなおさらだった。

さすがの僕も指名されてしまったては、何かしらの反応をせざるを得ない。やれやれ、と頭をかき、扉に近づこうとする。

しかし、瀬菜に袖を引つ張られ、それを阻止された。

「本題に入ろうか斎賀」

「いいけど、あいつどうするんだ？ 本当に放置？」

「ああ、愚民はもう用済みだ。というより、元々君との話し合いなのだから、他人は必要ないだろう」

まあ、そうなんだけど。その話し合いに混ぜ込んだのはどのどいつだ？

僕はそのまま袖を引かれ、さっきまでいた紫の椅子の前まで連れて行かれた。

ごめん彩乃、僕じゃお前の力になれない。

じゃ、また会おう。

第九談 行動

瀬菜はドカッと定位置である紫の椅子に腰かけ、足を組む。ここで僕は思うのだけど、どうして女子は足を組むとき、自然とスカートの中をガード出来ているのだろう。非常に不思議な現象だと僕は思う。まあ、戯言だけれども。

そんなことを疑問に思っていると、瀬菜が不審そうな視線を送ってきた。

「どうしたのかね斎賀？ またいやらしい考え事かい」

「僕の考え事」いやらしい事っていう決定事項取り払えよ」

「愚民と違って私のスカートの中はそう安くないぞ」

「お前エスパーだったのか！」

簡単に心の中を読まれてしまった。嘘を見破るというより心を読んでいたのかこいつは……！

「いや、君の視線が私のスカート付近に集中していたからだよ……。君に限らず男子という生き物は女ならば誰でもいいのかね？」

う……、視線が痛い。そうだ、自然に話を切り替えよう。

「保健室でもちらつと話した本庄真美ブログの話なんだけどな！」

「……………」

何？ この変な間……。

自分では見えなくても、額に脂汗が浮び始めたのがはつきり分かった。

瀬菜は心底呆れたようにため息をつく。

「まあいい。それでブログはどうだったんだ？」

「……え、ああ！ ブログに『翡翠の死神』について載っていたんだ。けど、そのページだけ文字化けしてて全く読めなかった」

「文字……化け？ 活字のお化けか？ それともそれも都市伝説？」

難しい顔をして、腕を組む瀬菜。

ああ、そうだった。こいつの機械音痴は相当だったんだ。でもアイコラ知ってて文字化け知らないってどういうことだよ……。

「えーっと文字化けってのは、例えばだな。携帯のメールあるだろ。メール画面の文字が普通の日本語になってなくて、平仮名、カタカナ、数字、アルファベット、記号なんかがひっちゃかめっちゃかな羅列に変わった状態のことだよ」

「……分かん」

瀬菜は口を尖らせて、僕の説明が理解出来ず不満そうな顔をする。

「現物見せた方がお前には早いかなあ」

僕はどうやってたら文字化けを見せられるか考えていると、

「なら、これを使えばいい」

椅子を九十度回転させ、すぐに元に戻すと、瀬菜は手にノートパソコンを持っていた。

これまた真っ赤で薄型のノートパソコン。

ってというか機械音痴の魔女がどうしてパソコンなんて持ってたんだ。僕がそれを受け取り、電源ボタンを押すと、パソコンはすぐに起

動した。電源は繋ぎっぱなしで、どうやらスリープモードになっていたらしい。パソコンの寿命縮むぞ。

それはともかく、たぶんこれは起動して使い方が分らず怖くなつて終了しようとしたけど、結局電源を落とす方法も分らずそのまま画面を閉じることになった結果だろう。

まあ、今回は好都合だからよしとしよう。

僕はインターネットを開き、昨日調べたキーワードを検索ベースに打ちこむ。当然結果は昨日と同じ。

本庄真美改め、雛上仁乃のブログの名前が表示される。それをクリック、ブログ内に入る。そして、『翡翠の死神』のページに辿りつく。

やはり昨日閲覧した通り、文字化けされている。

「これが文字化けだ。って見せたところで仕方ないんだけどな……」

「なるほど。確かに君の意味不明な説明の通り、ぐっちゃぐっちゃな文字の羅列になっているな。斎賀、君はこれを読めないというのが、解読すれば早い話じゃないのか？」

「パソコンの専門家じゃない僕には無理だよ。フリーソフトも落ちてなかったし」

瀬菜はそこでも「ん？ フリー？」と眉間に皺を寄せて難しい顔をする。

パソコンについてもいずれ機会があつたら教えてやってろう……。しかしながら、瀬菜に言われずとも昨日の段階で文字化けを修復する方法を調べていた。調べていたのだけれど、検索に引っかかるのはほとんどがメールの文字化け修復だけ。インターネットページの文字修復に関して有益な情報は得られなかった。もし、方法が載っていたとしても、経験も知識もない僕には到底不可能なプログラミングを要求されるだろうさ。

「こんな風になってたから本人に直接内容を聞くしかないと思ってただけど……。こんなことになるなんて……」

僕は体重を後ろに預ける形で両手を床に付き、力なく天井を見上げる。

「なるほど、そういうことか。なら、次の行動は具体的にになったな」

「次の行動？ 他にこのウェブページを解き明かす方法があるっのか？ まさか本庄真美のパソコンを直接調べるわけじゃないよな？」

確かに本庄真美のパソコンを調べれば記事のオリジナルが残っているはずだ。

ブログに関してはどのパソコンを使おうと、一旦自分の編集ページに入りさえすればブログを好き勝手出来る。しかし、その編集ページに入るには登録時に決めたパスワードが必要になる。

そこで本人のパソコンが重要になる。大方のブログユーザーは自分のパソコンにパスワードを自動登録してあるはずだ。毎回毎回パスワードの入力するのは面倒だし。

でも、本庄真美のパソコンへ辿りつくまでは遠すぎるんじゃないだろうか。

「パソコンを調べる？ パソコンを調べるとどうなるんだ？」

「どこまで機械音痴なんだよお前は！」

今日何回目だよこのツッコミ！

何の迷いもなく不思議そうに聞いてきた瀬菜は、僕のツッコミにキョトンとする。

しかし、すぐに自分の言葉が素人発言だったかに気付き、コホンと咳払いを一つ入れ、

「うん。君のパソコンを調べる方法も良い方法だとは思う。だが、今回は彼女の私物を探る方向で行こう。たぶんまだ教室に残されているはずだ」

と、さつさと話しを進め、さりげなく素人発言を無かったかのように取り繕った。

まあ、今さら僕に機械音痴関連で取り繕ったところで、どうにもならないけど。

「私物か。なら日記とか手帳とかが重要っぽいな。すぐに教室まで行くのか？」

「いや、それはやめておこう。さすがにこの状況下で教師が警察に見つかれば追い返されるのが関の山。それに後々動きづらくなるしな。動くのは夜だ」

「夜……か」

「どうした？ 夜に問題でもあるのか？ まさか怖いと言っんじゃないあるまいな」

僕はそんなバカな、と瀬菜の軽口を受け流す。

心配……、とまではないが不安要素があるのは間違いない。

『翡翠の死神』は夜の校舎を徘徊しているという噂がある。

さすがにこの事件の直後、さらなる行動を起こすことはあまり考えられないが……。可能性がないとは言い切れない。なにせ相手は得体の知れない都市伝説なのだから。

「とりあえず解散して夜また落ち合うことにしよう。時間は……メールする。それまで君は身体と精神を休めておくといい」

「オーケー。了解だよ」

そう言って僕は立ち上がり、帰宅準備をする。ただ鞆の中身に変化がないか確認するだけだけど。

理由は……、変態がいたからとだけ言っておこう。中身が無事なのを確認すると、僕は最後に瀬菜へ質問を投げかけた。

「なあ、お前って怖いもんとかあるの？」

その質問に瀬菜は薄く笑いを浮かべた表情で、

「私には君が一番の恐怖対象だと思えるよ」

と嘘っぽい回答で返してきた。

「……なんじゃそりゃ。いいよ、答えたくないんなら」

いいさ、どうせ普通の返答なんて初めから期待してなかったから。僕は若干テンション下がり気味の足取りで帰路につくことにした。

第十談 侵入

深夜二時を過ぎた頃。

僕は花月学園中等部校舎一階、いくつもある窓の内のうちの一つ、ちようど植え込みで姿を隠せる場所に座り込んでいた。

かれこれこの場所に座り込んで三十分ほどが経過している。

夕食後に届いたメールでは集合時間と集合場所の指定もされていた。加えてどうやら瀬菜が先に中へ入り、鍵を開けてくれるらしい。瀬菜がどうやって校舎内に侵入するかは分らない。窓を割って……とかじゃないと思う。たぶんね。

それにしても、時間も集合場所もあっているはずなのに三十分も遅れている。

まさか、瀬菜の身に何かあった……！

僕は思わず立ち上がって、校舎に侵入出来そうな場所を探しに行こうと一歩踏み出した瞬間。

「遅れてすまない」

後ろの窓から、ぴんぴんと両サイドに寝癖が跳ねた髪型の瀬菜が現れた。服装は昼間の制服から指定の赤いジャージに着替え直している。

申し訳なさそうな表情というよりも、どこか眠たげな眼をしていた。

……寝坊しやがったなコイツ。あー、心配して損した。

そのまま僕は手すりに足を掛けて、窓から校舎内に侵入した。目の前には二年五組の表札が下げられた教室がある。

どうやらここが目的の場所のようだ。

「いや、ホントすまなかったな。この詫びはいつか必ず返すから」

「別にいいよ、そんな。とつと探すもの探して終わりにしよう。僕ももう眠たい……」

「そうだなちゃっちゃんと終わらせるとしよう。恰好つけて深夜集合にしてみたものの、思いのほか体は正直だったしな」

え……。二時に時間設定したのって理由なし？ 警備が薄くなる、とかそういった安全策とかじゃないの？ マジでただの雰囲気作りのためなのかよ……。

ジト目の僕には目もくれず、小さく欠伸をする瀬菜。手元では何やら結構な鍵の束を指で一本一本掴んでは落とす、掴んでは落とす、と同じ作業をループさせている。

どうやら教室の鍵を探しているようだ。

「お前そんなどこで手に入れたんだよ？」

「職員室に決まっているだろう。困った時は職員室だ。学校を漁る時大概必要なものは職員室で手に入る」

……この子普段学校漁ってるの？ っていうか学校で漁るものって？ あれ、僕発想力が乏しいのかな。かなりヤバイ系だけど、皆が当たり前のように考えつくものしか思い当たらないぞ。中間とか期間の末に行われる苦行の祭典に使う、暗号のような文字が書かれた白い紙とかを探すことしか思いつかないぞー。

「それは無いから安心しろ。授業に出席していないとはいえ、さすがの私もテストは実力で受けている。漁るのは概ね本　　ところかな……」

瀬菜は鍵の束から目当てのものを探り当てたらしく、その鍵を教室の鍵穴に差し込んだ。

鍵を九十度回すとガチャ、と解錠された音が聞こえた。鍵穴から

鍵を引き抜くと、瀬菜は静かに扉を開く。

真つ暗な教室を微かな星明かりが照らしているだけの、なんとも寂しい風景。

机が六個六列に並ぶごく普通の教室。

だが、この教室から一人の生徒が姿を消している。

「さあ探すぞ斎賀。感傷に浸っている暇はない。君は左から調べてくれ。私は右から順に調べて行く」

瀬菜は腰まで伸びる長い髪を髪留めゴムを使って後ろで束ね、そのままロールアップの要領で上に茶色い髪留めクリップで纏め上げた。

「これで手掛かりがあればいいけど……」

僕は指示通り一番左端の机の中の横に立つと、椅子を退け、中を調べ始めた。

十数分後。

僕がちょうど三列目に入りかかったところで、瀬菜が声を上げた。どうやら本庄真美の机を発見したらしい。

机の中のを次々隣の机に出している。教科書、ノート、筆箱、手帳、少女漫画、テレビのリモコン、リコーダーなどなど。

一つ不可解なものが入っていたけれど、探していたものも発見。手帳はどこにでもあるようなピンク色で、リングファイル形式のもの。自分で貼ったのか、ところどころにデフォルメされたクマのシール。

外見は至って普通の女の子らしい手帳だった。

まだ中を探っている瀬菜を横に、僕は本庄真美の手帳を覗く。

っていかどんだけ机に物入れているんだ……。

「ビンゴ……か」

一ページ目から五ページ目まではプリクラ帳としての用途だったが、六ページ以降はびっしり都市伝説についての記述があった。

プリクラはカモフラージュ？ まあ、使い方は人それぞれだけどさ。

『翡翠の死神』についての記述がないか細かく目を通し、ページを進めて行く。

しかし、すごい……。

例えば『口裂け女』みたいなメジャーところで説明すると、その起源が何年の何処、どんな人が発祥かが書かれている、なんてのは当たり前。

それがどこの件で確認されたのか、『口裂け女』が確認されなくなつてから何年後何処で再確認がとられたか。また、この僕らが住んでいる地域でそれに関連したと臭わせる事件の内容まで事細かに書かれている。

さほど大きなものではない手帳に、丸っこい小さな字で詰め込まれた情報量に眩暈すら覚えた。

僕が『黄色い救急車』という都市伝説が書かれたページを捲ると、机の中身を出し終えた瀬菜が横から覗きこんできた。

「あ、これじゃないか？ ん？ 少し名前が違うな『翡翠の瞳の死神』……」

「都市伝説つても噂話だからな。少しくらい名前も変化するんじゃないか？ それより内容だ内容」

『翡翠の瞳の死神』の記述。

発祥は今から三年前。冬の寒い日。目撃場所は花月学園中等部一

年三組前の廊下。時刻夜六時過ぎ。

最初目撃したのは同中等部に通う女子生徒。部活が終わり、教室に忘れ物を取りに戻った時に遭遇。姿は全身を覆う黒っぽい外套、暗がりにはつきりと浮かび上がっていたのは翡翠色の瞳。その黒の外套纏う人物は彼女と目が合うなり、どこかへ走り去って行ったという。それから同中学で三度目撃情報が寄せられたが、最後の目撃以来パタッと出現しなくなったらしい。

「斎賀。過去の目撃情報は今は必要ない。現段階でのものを探してくれ」

「そうだな……」

僕は記載されている文章の後半部分に目を通す。

花月高校で『翡翠の瞳の死神』が目撃されたのは最初の目撃から二年半後。ここ数力月のことである。

しかし、前回と大きく異なるポイントが三つ。

一つ目は死神の目撃回数。

過去四度だけの目撃だったが、再度現れた死神は中高問わず十数回の目撃があった。

二つ目は実害。

初期の少ない目撃談が飛び交う最中、一人の女子生徒が花月学園高等部の屋上から墜落死した。これは『翡翠の瞳の死神』の仕業である。これについては雛上仁乃が目撃した。

三つ目。この都市伝説、『翡翠の瞳の死神』の正体が判明した。

ここで正体を記すと自身に危険が及ぶ可能性があるため伏せておく。しかし、正体を暴く手がかりを用意した。私はそれを。

「斎賀！」

「え？ うっお……！」

いきなり瀬菜に力任せに突き飛ばされた。

第十一談 対峙

当然のことで勢いよく吹っ飛んだ僕は、近くの机数個を巻き込んで転がりながら床に倒れる。

椅子と机に絡まる形で関節が思いつきり変な方向に曲がったような気もしたが、とりあえず問題なく動くので骨折の心配はないようだ。体中したたか打ちつけたせいでめっちゃ痛いけど……。

それにしても一体全体どうして突き飛ばされ。

「実は僕って予知能力者だったりするのか……？」

昼間の嫌な予感が的中してしまった。

僕は床に転がった状態で視線だけを持ち上げる。

さっきまで僕たちが立っていた場所。そこに黒い何かがいる。はっきりとは分らないが、黒い外套を被った何物か。

そう。

本庄真美の手記に記されていた『翡翠の瞳の死神』と姿が酷似している。瞳の色までは確認していないから『翡翠の死神』か。

いや、今はそんなことどっちでもいい……！ 死にかけたのか僕……。

本庄真美の机に何やら刃物のようなものが突き刺さっていた。

もし、瀬菜が僕を突き飛ばさなければ刺されていたかもしれない。僕は体の上に乗っかっている机と椅子を適当に退け、跳ねるように飛び起きる。そのとき不意に足元で何かが転がった気がした。

死神は僕には目もくれず、瀬菜を見据えている。

瀬菜も僕を突き飛ばした際に場所を移動したらしく、本庄真美の机から多少なりとも遠ざかっている。

しかし、死神との距離は僅か。ほんの数歩で詰めよれば手が届く。加えてすぐ後ろは窓。それ以上後退することが叶わない状態だった。死神は机に刺さった刃物を抜くことはせず、次なる得物を懷から取り出した。右手に構える得物。刃渡りは分らないが、三十センチ定規くらいの長さはある包丁のような形だった。

やはり瀬菜に狙いを定めている。

やばいつ……！

死神が動いた。

距離を詰め、月明かりに煌めく刃物を瀬菜目掛けて振り下ろす。

「くっ……！」

防御手段のない瀬菜は体を右に倒し、ギリギリの所で振り下ろされた刃物を回避する。

だが、それだけでは死神の振るう刃物は止まらない。

再び瀬菜を射程範囲に捉え、左斜めから刃物を振り下ろす。

これも状態を横に逸らし回避した　と思われたが、僅かに右腕を掠った。赤いジャージが薄く切れ、白い肌が覗く。

「キシシシシシシ」

『翡翠の死神』が気味悪く笑い、愉快そうに刃物が振りかぶられた。

「このっ！　調子に……乗るなよ！」

防御に徹していた瀬菜が動く。

自分の足に構うことなく眼下の机を死神目掛けて蹴り飛ばした。近距離から蹴り放たれた机の角が死神の腹部にヒットする。

その衝撃で死神がふらついた隙を突き、瀬菜は窓際から入口付近

まで距離を取ろうと視線を外した。

「キシキシキシキシ！」

ふらつきながらも死神は一步前へ動き、瀬菜の腕を掴む。

「……嘘でしょ」

一瞬生まれた隙を突いたつもりが、逆に隙を突かれた形となる。体の重心を逃げる方向へずらした瀬菜の体に、次の攻撃を要求するには僅かにタイムラグが生じてしまう。

もし、回避行動が取れたとしても、腕を掴まれている状態では今度こそ次で終わる。

だけど、そんなこと僕がさせるわけないだろ！

「うおおおおお！」

僕は床を蹴り、右手に持つ武器を振りかぶって真後ろから死神へと飛びかかった。

武器と言ってもリコーダーだけど、長さも硬さもある。リコーダーにするには申し分ない。

それに、死神の態勢も瀬菜と同様、現段階で僕の攻撃を完全に避けられるものじゃない。

それに、ヤツこそ墓穴を掘った。

予想通り死神は瀬菜の腕を離し、僕の攻撃を回避するために後ろへ飛び退く。

それは無理なんだよ……！

後ろへ飛び退いたはずの死神の体が、グイッと元の位置まで引き戻される。

「残念賞だ。私のジャージを切った罪を思い知れ」

さきほどまで腕を掴んでいた瀬菜に自らの腕を掴まれ、回避行動を阻まれた。

死神は瀬菜の手を振りほどこうと必死にもがくが、すでに遅い。

もう僕の射程範囲に入った。

僕は全力を込めた腕と肩の力、飛んだ反動を余すことなく使い、死神の肩口へとリコーダーを叩きこんだ。

そして前方へ倒れ込む勢いを利用し、右足による回し蹴りを止めとばかりにお見舞いする。

いくら貧弱な僕とは言え、男子の蹴りだ。死神の正体がムキムキマッスルだとしても、容赦なく吹っ飛ぶ。

予想通り、机を巻き込みながら一直線に吹っ飛んだ。

「やったか……？」

まだ警戒は解かない。

アニメやゲームならここで緊張を緩めた瞬間、大惨事が起こるからだ。だけど、今こうやって非現実のような現象と向き合っていると、ゲームもリアルも対して変わらない気もする。

まあ、ゲームを作ってるのも人間だしね。

僕は右手に持ったリコーダーをそのままに、近くの机から適当な物を取り出す。

筆箱か、丁度いい……。

僕は筆箱とリコーダーを持ちかえ、机に埋もれたままの死神に投げつける。

とりあえず当たるよう、そこまでの威力は込めずに。

しかし、投げつけた筆箱は標的に当たる寸前で叩き落とされた。

「キシキシキシキシ」

死神がゆつくりと起き上がる。

だが、ダメージがないわけではない。主に僕の打撃がヒットした右肩を庇っているようで、もそもぞと外套が動いている。

大きなダメージは右肩にしかない。どうやらまだまだ動けるようだ。

僕はリコーダーを右手に持ち直し、応戦準備を取る。

瀬菜も同様に体を横向き変え、いつでも椅子を蹴飛ばせるようさりげなく足の位置をずらした。

一呼吸置いた刹那。

死神が瀬菜目掛けて突進してきた。

やはり飽く迄も狙いは瀬菜らしい。

瀬菜は自分に向かってきた敵を、僕の予想通り椅子を蹴飛ばして応戦する。

だが、その攻撃は予め読んでいたのか、死神は左腕を盾にして防いだ。

「っ……！」

瀬菜の眼前で刃が煌めく。

まずい……！

僕は咄嗟に手にあるリコーダーを死神の腕へと投げる。命中率は低くなるが、気を逸らせば瀬菜が逃げる隙を作れると考えた。

投げたリコーダーは死神の腕ではなく、偶然にも刃物そのものへと命中。衝撃で刃物が宙へと舞った。

だが、死神は投げつけられたものや、飛んでいった刃物を気にも留めない。

そのまま前へ、瀬菜へと手を伸ばした。

いや、違う。瀬菜じゃない……！

「手帳だ！」

叫んだ僕の声にハツとなる瀬菜は、瞬時に僅かながらも本庄真美の手帳を体に寄せた。

しかし、やはり一瞬遅い。

先に伸ばしていた死神の手が手帳の半分を掴んでいた。

その際、手帳が開いた状態となり、二人はその両端を手取る形になっている。

「瀬菜！」

手帳が破れないよう注意しろ、という意味で叫んだつもりだった。その声にまず反応したのは死神。僕が応戦してくると思ったのだろ。手に取った半分の無理やり引っ張り、力づくで奪う選択をした。

当然、装飾されているのが手帳は紙。そのまま真つ二つにビリビリと音を立てて破けた。

その光景を目の当たりにした死神は、手帳の半分の懷に仕舞い後ずさると、一目散に教室を飛び出して行った。

さつき投げて床に落ちたりコーダーを拾った僕も、教室から飛び出す。

すると、教室の目の前にある窓から四つ先の窓が開いていた。

そこから身を乗り出して辺りを見回すと、校舎から数十メートル離れた場所を死神が走って行くのが見えた。

まだ追えるか？ いや、無理か……。

姿を目で追えたのも束の間、黒装束の死神は暗がり自身を溶け込まして姿を消した。

仮に追えたとしても、まだ凶器を所持している可能性は高い。身の安全を考慮しての追跡中止でもあった。

緊張を解いて僕が教室に戻ると、瀬菜が悔しそうな顔で手帳を見

つめていた。

「怪我とかしてないか？」

「ん？ ああ。私は大丈夫だ。ジャージを少し切られたが、体までは届いていないよ。それよりも済まない。半分持つて行かれた……」

「まあ、いいよ。大方は読んだんだし。お前に怪我がない方が重要だろ」

軽い口調で慰めてみるも、瀬菜にとってはあまり効果がなかった。眉間に深い皺を寄せて唇を噛んでいる。

「あの不審者め。こんどあつたら容赦しない……」

うわあ。負のオーラ半端なく滲み出てるんですけど……。

おや？

苦笑いを浮かべる僕の眼の端に、手帳の一文が入り込んだ。

「ちよつとそれ貸してくれ」

手帳をひょいっと掴み上げ、目を通す。

綺麗に真つ二つにされたおかげで読む分には全く支障はない。

やつぱりそうだ。悪運は強いってことか。

襲われる前まで読んでいた『翡翠の瞳の死神』の後ろ半分がそこには記載されていた。

つまり、奪われたのはほぼプリクラ帳と化している手帳の前半部。残ったのは都市伝説の内容が多く載せられた後半部だった。

「へこむのはもう少し後にしよう。瀬菜、本庄真美が残した手掛かりを使って『翡翠の死神』の正体を暴くぞ」

「どういうことだ？ 詳しく説明してくれ」

「もちろん説明はするけど、ここで落ち着くのは危険かもしれない。とりあえず、家で話そう。家なら必要な物も揃ってるし」

言葉の真意を理解しかねている瀬菜を余所に、僕は本庄真美が残した手掛かりの最後の部分を頭の中で復唱していた。

私はそれを、『翡翠の瞳の死神』の正体を記した暗号として都市伝説を愛する友人へ送る。暗号を見事解き明かしたもののだけがこの『翡翠の瞳の死神』の真実へと辿りつける。さあ、私が至った解答へ辿りついてみたまえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7629x/>

スクール・ルーマー

2011年11月21日12時06分発行